

燈

光

3

灯台151周年記念講演会／祝賀会及び灯台企画展の開催

第八管区海上保安本部交通部

第八管区海上保安本部では、灯台151周年記念イ

ベントとして、令和元年11月2日（土）に講演会及び

祝賀会を舞鶴グランドホテルで、同年11月2日（土）

（10日（日）の間で灯台企画展を舞鶴市立赤れんが博物館において開催しました。

その模様を、次のとおりご紹介します。

【灯台151周年記念講演会】

灯台151周年記念講演会は、11月2日（土）16時から舞鶴グランドホテルにおいて開催されました。昨年盛大に開催しました灯台150周年記念式典に引き続いての大イベントであり、本田太郎衆議院議員、井上一徳衆議院議員、多々見良三舞鶴市長、上羽和幸舞鶴市議長、池田正義京都府議会議員、小原舞京都府議会議員をはじめ、会場がほぼ満席となる62名の聴講がありました。

次 第

1 開会挨拶

2 来賓挨拶

3 記念講演

○灯台を活用した地域観光振興支援の推進

（観光資源としての灯台活用に係る海上保安庁の

取り組み）

第八管区海上保安本部交通部長 金城政彦

○市民団体から見た灯台の観光活用

（過疎の集落に灯る希望の光）

経ヶ岬灯台保存会会長 小谷将貴様

○灯台懐旧談

（へぐらしま 舳倉島灯台滞在勤務の思い出）

元東京湾海上交通センター所長 山下二郎様

○灯台懐旧談

（幼少期にサハリンの灯台で暮らした思い出）

元舞鶴海上保安部長 堂本幹夫様

4 閉会挨拶

最初に、第八管区海上保安本部長伊藤裕康から開会の挨拶が行われ、続いて本田太郎衆議院議員、井上一徳衆議院議員からそれぞれご祝辞を賜りました。

講演会は灯台に深くかわってこられた方々を講師にお招きし執り行われました。

始めに、第八管区海上保安本部交通部長金城政彦から「灯台を活用した地域観光振興支援の推進〈観光資源としての灯台活用に係る海上保安庁の取組み〉」と題して、地域活性化のために灯台を活用している事例や展望について講演が行われました。

続いては、経ヶ岬灯台保存会会長小谷将貴様から「市民団体から見た灯台の観光活用〈過疎の集落に灯る希望の光〉」と題して、経ヶ岬灯台保存会の活動内容と灯台を活用した観光振興が、過疎化が進む町に大きな希望になることについてご講演いただきました。講演



第八管区海上保安本部長 開会挨拶

後には国会議員から、保存会は素晴らしい活動をされています、これからも頑張ってくださいとの声援が送られました。

次に、元東京湾海上交通センター所長山下二郎様から「灯台懐旧談〈舢倉島灯台滞在勤務の思い出〉」と題して、石川県北方の絶海の孤島に所在する舢倉島灯台の滞在勤務の苦労話など数々のご経験についてご講演いただきました。仕事は先輩が丁寧に教えてくれたのでよかったが、食事に関して当時は家電製品もなく自炊に苦労した、冬場にな

ると島民が輪島市に帰ってしまい、人と接する機会が無く辛かった一方、夏場には一時的に漁業関係者やその家族が島に滞在し、小中学校、診療所、駐在所なども開設され人口が増えたことや島民の皆さんと仲良



講師 山下二郎様



講師 小谷将貴様

くしたことなどの話がありました。講演の締めくくりとして、広島、尾道、七尾、横須賀、横浜など転動したその土地土地で地元の人々と接し、多くの知人を得たことが宝物であり、特に青春時代を過ごした舩倉島に夏場のみ勤務していた看護師さんが、人生の伴侶であり、今でも仲睦まじく暮らしているとの紹介がなされ、会場は大きな拍手が鳴り響きました。

最後に、元舞鶴海上保安部長堂本幹夫様から「灯台懐旧談〜幼少期にサハリンの灯台で暮らした思い出〜」と題して、お父様が灯台を管理する看守をされていた関係で、幼少期に現在の樺太の南部にあった宗仁岬灯台で過ごされたときの話で、サハリンの灯台における生活状況や、灯台視察船の羅州丸らしゅうまるで引越しをした思い出などについてご講演いただきました。当時の生活は電気ガス水道が無く、水は雨水を利用していたなどと語るなか、カモメの巣から卵を取ったことや砂浜に打ち寄せたニシンの大群を獲ったことが、当時の良い思い出ですと懐かしそうに話



講師 堂本幹夫様

されました。また講演会場には、講師堂本様のお父様堂本宗治様と航路標識看守業務傳習生の同期生であった元西秀次郎様の御息女友成久子様とその御息息公一様親子が徳島県から聴講にお越しになっており、久子様は幼少の頃経験したサハリンでの生活を感慨深く思い出されていました。

講演会では戦前戦後の灯台勤務の様子を知っていたことができ、大変有意義なものとなりました。聴講にお越しいただいた皆様はもちろんのこと、講演を引き受けていただきました皆様には心より御礼申し上げます。

(参考) 灯台151周年記念講演会の動画が視聴できます。7ページ参照

【灯台151周年記念祝賀会】

灯台151周年記念祝賀会は、11月2日(土) 17時30分から舞鶴グランドホテルにおいて開催されました。講演会に引き続き続いての開催であり、井上一徳衆議院議員、多々見良三舞鶴市長、上羽和幸舞鶴市議会議長、池田正義京都府議會議員、小原舞京都府議會議員をはじめ、灯台へのご理解ご支援をいただいています関係者皆様を含め54名にご来席賜り、盛大に執り行われました。

次第

- 1 開会挨拶
- 2 感謝状贈呈
- 3 乾杯
- 4 来賓挨拶
- 5 海上保安庁OB紹介
- 6 祝電披露
- 7 喜びも悲しみも幾年月 斉唱
- 8 閉会挨拶

最初に、第八管区海上保安本部次長江口満から開会の挨拶が行われ、続いて感謝状贈呈式が執り行われました。感謝状は伊根港灯台ほか1基の施設や灯火を監視していただいている方に対して、舞鶴海上保安部長から贈呈されました。受賞者の仁谷嘉正様から『灯台は航海の安全のため、無くってはならないもの、



第八管区海上保安本部次長 開会挨拶

引き続き灯台の監視を精励します』とのお言葉を頂きました。

贈呈式が終わったあと、海上保安庁OBに乾杯のご挨拶とご発声をいただき、出席者一同が唱和して歓談が始まりました。

会場には「皇室と灯台」と題し、上皇上皇后両陛下が皇太子及び皇太子妃時代に、また天皇陛下がご幼少のころに灯台をご訪問された際の写真パネルを展示するほか、公益社団法人燈光会様から「灯台絵画コンテスト2019」で八管区内在住のお子様から応募のありました作品を借用して展示しました。子供たちの力強い絵のタッチやユニークな色使いに、絵画をご覧になった皆様から感嘆の声があがっていました。

また、会場にスクリーンを準備して、フリーペーパー「灯台どうだい？」編集長不動まゆう様製作の経ヶ岬灯台紹介動画や燈台守の歴史を記録した映像を上映するなどし、出席者皆様に楽しい時間を過ごしていた



感謝状贈呈式

いただきました。

祝賀会中盤において、ご来賓としてご臨席くださいました多々見良三舞鶴市長、上羽和幸舞鶴市議会議長、池田正義京都府議会議員、小原舞京都府議会議員、西川順之輔海上保安協会舞鶴地方本部長からそれぞれご祝辞を賜りました。その後は海上保安庁OB紹介や祝電披露が行われ、あつという間に祝賀会の終わりの時間となってしまうしました。

祝賀会の最後は、灯台記念日に相応しい歌「喜びも悲しみも幾年月」で締めくくられ、出席者には歌詞カードが配られ、職員はステージに集まり



「喜びも悲しみも幾年月」斉唱



多々見舞鶴市長 祝辞

出席者一同で斉唱、会場全体に割れんばかりの拍手が響き渡るなか祝賀会は閉会となりました。

【灯台企画展の開催】

灯台企画展は、11月2日(土)～同月10日(日)の間、舞鶴市立赤れんが博物館では開催されました。企画展開催中、同博物館では日本遺産ウィークのイベントも行われ、開催初日からの3連休(土、日、祝・文化の日)だけでも、3千人を超える来館者があり、多くの方々に灯台の歴史や役割を知っていただくことができました。

灯台企画展では、第八管区海上保安本部が保管する灯台レンガに加え、「皇室と灯台」の写真パネル、世界航路標識の日の創設記念として「世界の灯台」の写真パネル、「灯台絵画コンテスト2019」応募作品の展示などを行いました。来館者からは『立石岬灯台に行ってみよう』『出雲日



来館者で賑わう企画展展示室

御碕灯台に行ったことがある』とパネルに指をさしながら楽しそうに話している様子や『どうして灯台は赤色と緑色があるの?』と疑問・質問を職員に問いかけてくる場面もありました。

また、パネル展示等のほかに博物館の協力も得て、博物館内を巡るスタンプラリーも開催しました。景品は灯台記念日の記念品として八管区内の有名な灯台を写真プリントしたオリジナル缶バッジで、スタンプラリー参加者は大喜びで胸に缶バッジを着けるなど、大盛況のうちに企画展を終えることができました。

八管区では昨年度に引



灯台記念日 灯台缶バッジ



灯台の説明を受ける来館者

き続き、灯台記念日イベントを実施し、今年度は講演会、祝賀会、灯台企画展の構成とし、盛況のうちに無事終えることができました。これもひとえに皆様の灯台へのご理解、ご支援、ご配慮の賜物と心より感謝しております。ありがとうございました。

◆灯台151周年記念講演会の動画

<https://www.kaiho.mlit.go.jp/08ranku/todaikinen1.html>または「灯台151周年記念講演会」で検索

※ホームページの都合上、スマートフォンでは動画を視聴することができません。



記念講演会
動画

◆フリーペーパー「灯台どうだい?」編集長不動まゆ

う様製作の経ヶ岬灯台紹介動画

You Tube 内で「TDC灯台レポート011経ヶ岬灯台には地下室が?!」で検索



YouTube

《紹介》経ヶ岬灯台保存会
第八管区海上保安本部交通部企画課

皆さん、経ヶ岬灯台保存会をご存じですか？

経ヶ岬灯台保存会は、京都府京丹後市の地域住民を中心として平成29年に発足し、20代〜70代の会員26名が在籍するボランティア団体です。

京丹後市の貴重な観光資源である経ヶ岬灯台を守り、観光振興に繋げていく活動を実施しています。

具体的には、経ヶ岬灯台に通じる遊歩道の清掃、落石除去作業などですが、これを「経



写真1 令和元年10月20日 遊歩道整備プロジェクト記念撮影

ヶ岬灯台遊歩道整備プロジェクト」と銘打って、京都府民、京丹後市民に対して大々的に周知して協力を仰ぎ、春と秋に清掃活動を実施しています。このほか、灯台の一般公開にあわせて「経ヶ岬灯台まつり」を企画し、周知ポスターの作成・掲示に始まり、公開当日は駐車場にブースを設置するほか灯台ガイドを実施しています。

第八管区海上保安本部（以下、八管本部）と舞鶴海上保安部は、これらのボランティア活動を実施していただいている同会と関連情報の共有を行い、活動が末永く続くよう協力しています。

話は変わり、八管本部では昨年11月2日に灯台15周年記念講演会を計画し、講師の一人として経ヶ岬灯台保存会に講演を依頼しました。小谷会長からは「市民団体から見た灯台の観光活用〜過疎の集落に灯る



写真2 清掃活動

希望の光」と題して経ヶ岬灯台を活用して地域の「にぎわい」創出を目的に活動を実施していることや市民団体目線で灯台を活用した取組みなどについて講演をいただきました。正に海上保安庁交通部が灯台観光振興を推し進めている取組みを後押ししていただけの内容で、聴講した地元国会議員からも何点か質問があり、「同会の取組み内容を詳しく知ることができて大変有意義であった。がんばれ。」とのお礼と声援がありました。



写真4 令和元年11月2日
灯台151周年記念講演会



写真3 経ヶ岬灯台保存会 小谷会長

講演会の後は、祝賀会へと続きます。多くの出席者が交流を深め、灯台談議に花を咲かせる中で、小谷会長から「以前、経ヶ岬灯台に滞在してお仕事をしていた人から当時の苦労話を聞きたい。」と依頼があり、早速、古い名簿や職員の伝手を探り、何とか、舞鶴市在住の堀田克治氏にたどり着き、連絡を取ることができました。

堀田氏は海上保安学校灯台科二期生で現在88歳、昭和44年から50年にかけて同灯台で滞在勤務をさ



写真5 令和2年1月17日 経ヶ岬灯台滞在経験者 堀田氏へのインタビュー

れています。

本年1月17日に実施した堀田氏へのインタビューでは、家族と離れ、食料を背負って灯台まで通じる山道を長時間登ったこと、特に雪の日は大変だったこと、娯楽が無い灯台に何日も滞在し、天水を利用して不慣れた生活を送っていたこと、草刈り、掃除はもちろん、薪割りや野菜作りなどを懐かしそうに話されています。

経ヶ岬灯台保存会では、インタビューの様子を1月21日には早速フェイスブックに掲載し、保存会の活動報告として会員に周知しています。

最後に、経ヶ岬灯台保存会は、同灯台を観光資源とするための活動を実施すべく、日本各地の灯台の活用事例や地域との連携方策を入手すべく情報収集を行う

経ヶ岬灯台保存会
1月21日 18:58

令和2年1月17日(金)、昭和44年～50年に「経ヶ岬灯台」で灯台守として滞在勤務に従事された、堀田克治氏を訪問させていただき、当時の貴重なお話を伺いました。

家族と離れ、食料を背負って灯台まで通じる山道を登り、娯楽はおろか水もない灯台で何日も滞在して、雨水を活用した不慣れた生活を送っておられたこと。

灯台を目指す途中で、日本海を見ながら泣いたこともあったこと。

灯台の整備や薪割り、草刈り、掃除、野菜作りなど自然相手に体を使った昔ながらの生活を通して、自分の力で生きていく術を学んだこと。

景色は良く、灯台の光を見続ける生活を送ったことで、悟りを開くことが出来たかと思っていますとお話になりました。

今回の訪問を通じて、灯台守が如何に過酷な仕事であったのかを知ることが出来ました。

台風や豪雪など、どのような環境下でも、灯火を絶やすことなく、日本海を行き交う船舶の安全を守り続け、日本の発展に大きく貢献された灯台守の皆様には心から敬意を表したいと思います。



12

写真6 フェイスブック

ています。いつか皆様の町にもお邪魔するかも知れません。その折には是非ともご協力のほどよろしくお願います。

(小谷氏講演会動画)

URL:https://www.kaiho.mlit.go.jp/08kanku/todaiken/todaiken_movie_odani.html

浜田港入口のアンテナ。

さようなら。

浜田海上保安部交通課 藤 本 正 人

子供時代のアンテナの記憶

幼少の頃、今の勤務地である浜田市にある母の実家の工場で暮らしました。

父が船乗り、母が実家の従業員のため昼間は祖母に預けられており、祖母のお供で裏山の畑作業が日課でした。

今は裏山が削られて消防署となっておりますが、当時は日本海に面した風光明媚な地で、もの心ついた頃から約3キロ離れたアンテナがくっきり見えており、当時は何なのかわからないまま毎日見ていました。

その後、父の転勤で浜田市から転居しましたが、夏休みとなれば浜田の少年として毎日裏山に行く日々でした。

ある日、水産高校に通う親戚のお兄さんと裏山での畑作業中に「あのアンテナはなに？」と聞いたところ、「海上保安庁が船のために電波を出していると学校で

習った」と教えてもらいました。その後、そのお兄さんは海上保安庁に入り、私も後に続き、お互い定年まで勤めました。

初任の頃から浜田勤務を希望しましたが、初中々適わず、初めて浜田海上保安部勤務となったのは平成14年（2002年）のことで、アンテナを初めて見てから実に40年近く経っていました。

浜田での思い出

アンテナは当初は中波の無指向・ロータリービーム局として、船舶で局からの方位を把握するための電波を発射するために設置され、平成10年（1998年）



アンテナの場所（山の下が海上保安部）

からは中波の無指向のほか、航行衛星であるGPSの精度を上げるための補正信号を発射するディファレンシャルGPS局(DGPS)として使用されていました。他の局と違い、旧式の送信機に外付けユニットが付いていたため、点検は複雑且つ細心の注意が必要で、初めてこの機械を扱う身には結構大変でした。

また、雷サージに弱く、後に特注で製作されたオトリセット回路が設置されるまでは雷でよく電波が停止し、本庁から連絡があればその都度リセットをするため数え切れないほど局に行くこととなり、面倒くさい半分・愛着半分でもありました。

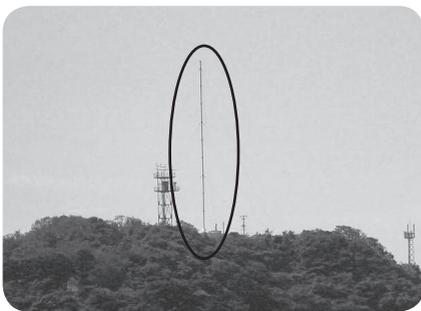
1月のある日(確か私の誕生日の翌日)、浜田市内で懇親会中に保安部から電波が止まっていると電話があり、タクシーで同僚と局に向かい、点検するとDGPSの信号を作る部分が落雷により全滅してどうしようもない状態でした。そして本庁と電話でやり取りしている最中に突然大きな音!・光!・火花!、アンテナに落雷したと直感しました。

幸い人員は無事でしたが、アース線から出た火花が無線機器の裏に置いていたダンボール箱に引火し燃え上がり、火災警報が保安部に入り、2人で速やかに消火したものの時すでに遅く、保安部からの通報で消防

だけでなく警察まで来る大騒ぎとなりました。当時、現場にいたからこそ消火できましたが、最初の落雷で火災となっていたら危うく中の物が焼失してしまうところでした。

火災発生時は煙が充満して2人とも一瞬パニックとなりかけましたが、気を取り直して消火器を探したところ送信機室の定位置になぜか無く、隣の電源室にあったバッテリー補水のための水タンクで濡らしたモップで叩いて何とか消火しました。後から考えたら、備え付けの消火器はABC粉末タイプで銅を腐食させる性質があり、まともに噴射したら電気・無線の機器が壊れるところであり、結果的には不幸中の幸いでした。

管区本部に事情説明して二酸化炭素式消火器を要求したと、金額が高く年度末ということもあり予算が無いとのつれない返事。「あの時、火を消したのは誰でしょうか?」の一



ありし日のアンテナ

言で「わ、判りました。買えばいいんでしょ！」と一転購入することになりました。交渉事に時には恩着せも必要だと悟った一幕でした。

平成15年（2003年）には、老朽化したアンテナの建て替え工事があり、今までの鉄骨から鋼管アンテナとなり、これに合わせてオートチューナーや自動リセット回路等新型の機器が増設されてトラブルはほぼ皆無となり、以前のように度々行くことはなくなりましたが、何かしら寂しくもありました。

ついにアンテナ撤去

浜田DGPS局6年、丹後DGPS局3年、舳倉島DGPS局2年、再び浜田DGPS局約3年と通算約14年間に亘りこのタイプのアンテナと関わりましたが、平成31年3月1日ついにDGPS廃止の時が来ました。

電波を停めた後に沈黙したアンテナを眺め、60代となった自分と重ね合わせて一抹の寂しさを感じました。

再度の浜田勤務となって3年半以上、自転車通勤の度にアンテナを眺めつつペダルを漕いでいましたが、その年の11月末、撤去工事でアンテナは地上から消えて行き、今はアンテナの無くなった山を眺めての自転

車通勤では寂しさを感じています。

思えば、一度建て替えられたとは言え幼少の頃から見ていたアンテナであり、1〜2年後に再任用も終了して浜田市から離れる身にとって、アンテナの最後が看取れたことが、唯一の救いかと思いません。

昭和35年（1960年）7月から令和元年（2019年）11月まで60年近く浜田港の入口に立っていた海上保安庁のアンテナ、長い間お疲れ様でした。同じ時代を生きた私の心の中では今もそびえ立っています。



撤去され、仮置き中



撤去工事中



金沢大野郵便局における大野灯台の粹な取り計らい

金沢海上保安部 交通担当次長 藤島 充良

1 何ゆえ郵便局に大野灯台？

令和2年1月9日、小職が金沢市大野町にある「大野湊食堂」に昼食を食べに行つた帰りに金沢大野郵便局に寄つたところ、大野灯台のペーパークラフトが展示されているのを発見しました。(写真―1)

郵便局の方に経緯を伺つたところ、三嶋咲栄郵便局長が対応され、3年前の大野町による「こまちみな」と「祭りにて大野灯台が一般公開されており、配布されたペーパークラフトを同局長が作成し、展示していたとのことでした。

小職は、海上保安友の会金沢支部事務局を務めており、通常は友の会郵便口座がある金石郵便局を利用していることから、金沢大野郵便局に行く機会が全くなく、大野灯台のペーパークラフトが金沢大野郵便局に展示されていることは、残念ながら知りませんでした。

同ペーパークラフトは、展示されてから約3年経過

しており、さすがに古くなつていたこと

から「後日、

新しいペーパークラフトを

提供させていただきます。」

と約束し、同郵便局を後に

しました。

保安部に帰り、この話を

したところ、誰もこの事実

を知りませんでした。大野

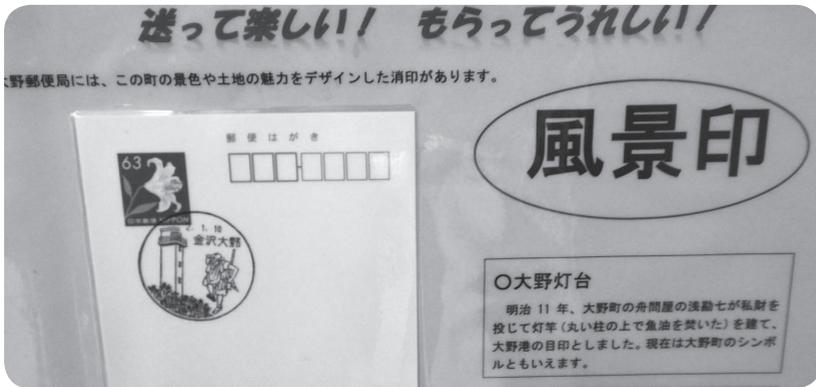


(写真―1) 郵便局に展示されていた大野灯台関係資料

灯台近くの郵便局なので、あり得る話なのですが、なんと郵便局の消印にまで大野灯台が採用されており、同郵便局の大野灯台に係る粹な取り計らいに全く頭の下がる思いでした。

郵便消印に関わる説明書きには、「送って楽しい！ もらってうれしい！風景印、金沢大野郵便局には、この町の景色や土地の魅力デザインした消印があります。：大野灯台は大野町のシンボルともいえます。」と大野灯台を消印に採用した経緯が記載されていました。（写真－2、3、4）

1月14日に新しい大野灯台のペーパークラフトを手渡すこととし、襟を正して伺ったところ、同郵便局長が入口で待ってくれていました。大野灯台のペーパークラフトのリニューアルだけでは芸がないと考え、大野地区に係留して



(写真－2) 大野灯台の風景印の説明



(写真－4) 大野町のシンボリック的存在



(写真－3) 大野灯台の郵便消印



(写真-5) 最左列が神対応していただいた三嶋局長



(写真-6) 海保コーナーとしてリニューアル

いる巡視艇「わかぜ」及び対岸の五郎島に係留している巡視船「はくさん」のペーパークラフトを作成し、お渡ししたところ大変喜んでいただけ、同郵便局に海保コーナーとして展示していただけることとなりました。(写真-5、6)

金沢大野郵便局の周辺は住宅地があり、利用世帯は約750で、約2000人、1日あたりの来客者は30人から40人あるそうで、今後、多くの方に海保コーナ

2 大野灯台の歴史について

1を見ていただき、海上保安思想の普及に繋がればと考えます。

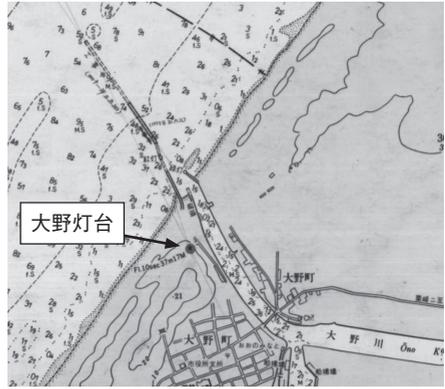
同郵便局は、「通信文化新報」によれば、4人体制ではあるものの全員営業の努力の結果、営業目標の全種目達成を平成29年度、平成30年度とV2達成しており、今年度もV3達成を目指しているそうです。局長のモットーは「頼られる社員に！」であり、少ないスタッフで幅広い業務に対応すべく、業務知識はもとより一般教養を身に付けるなど自己啓発に努めるよう進言しているとのこと。

大野灯台を訪れた際には、同郵便局からはがき等を出せば、大野灯台の消印が押しもらえますので良い記念になると思います。

大野灯台は、踊場等の強度不足の関係から、ここ2年は、一般公開は行っていませんが、日本の灯台50選にも選ばれただけあって、遠方からわざわざ大野灯台を訪れる灯台ファンの方がおられ、時間が許せば灯台に上がっていただくことがあり、この機会に併せ、大野灯台の歴史について少し記載したいと思います。



(写真－8) 昭和60年金沢港



(写真－7) 昭和39年大野川

現在の金沢港は大野川を拡幅し築港された港で、今年開港から50年を迎えますが、古い海図を見るとその歴史が良くわかります。昭和39年の海図で、本来の大野川の状況が把握でき(写真－7)、昭和60年には現在の金沢港に近い状況となっています。

(写真－8)

大野川の河口は、江戸時

代には北前船が寄港する港として廻船問屋を中心として大いに栄えました。明治11年11月に大野町の浅勘七が私資を投じて黒く塗られた地上6メートルの木柱(灯柱)を右岸河縁に建て、その先端にかがり火を掲げました。この木柱は明治25年に廃止となり、当時の町長である堀義順氏が浅勘七の功績が煙滅するのを憾み、町会の決議を経て、明治28年7月に灯台の設置を出願・認可され、明治29年11月に起工し、明治30年8月15日に日和山灯竿(白色、地上7メートル)と称し現在の大野灯台が建っている裏山に設置されました。この灯竿は、明治45年3月31日に廃止されましたが、夜間における船舶の出入港に不便を感じ、私設(設置者不明)の標識として大野川右岸河口(北緯36度36分55秒、東経136度56分24秒、旧測地系)に地上高11メートルの杉丸太の先端に電球をつけたものが設置され、その後、公設の標識として許可されました。昭和9年3月1日に地上高9メートルの大野灯柱が完成(北緯136度36分24秒、東経36度36分54秒、旧測地系)し、昭和26年6月1日に金沢市から海上保安庁に移管され、大野港の改修、大型船の増加に伴い、昭和27年11月11日、現在の大野灯台建設に着工し、昭和28年4月21日に初点灯しています。

3 大野町でぜひ

寄っていただき
たい所（番外編）

冒頭で紹介した大野湊食堂（写真－9）は、交通課職員に勧められた食堂で、映画「しあわせのかおり」のロケや「鶴瓶の家族に乾杯！」の収録が行われた名所で、昭和のレトロな雰囲気があり、コクと深みのある大野醤油を使ったチャーハン（写真－10）が大変おいしく、特にチャーハンに付いてくるスープが感動ものです。若鳥を醤油で煮込んだだけ



（写真－10）チャーハン



（写真－9）大野湊食堂

のスープですが、大野醤油の旨味が良くわかる一品です。このラーメンもこのスープが使われており大変おいしいのですが、1コインで食べられるチャーハンに付く他の味が混ざらないスープが私の好みです。なお、お昼の時間帯は、マーボー豆腐など3品のおかずがバイキング形式で無料にていただけ、大野町に來られた際はぜひとも立ち寄っていただきたい所です。

4 おわりに

大野灯台の前身となる大野灯柱は、昭和9年に設置され、現在の大野灯台の銘板においても初点は昭和9年3月と明記されています。昭和9年当時は、灯台の建設は通信省燈台局が担っており、美保関灯台に見られるように、灯台に郵便マークテがデザインされた灯台があります。（写真－11）

海上保安庁は現在、国土交通省に所属していますが、灯台150年の歴史の中で組織の変遷が幾度と行われ、明治18年12月から昭和18年11月までは灯台事業は通信省で行われており、今回の金沢大野郵便局との縁は、時代を越えた繋がりであると感じています。

大野灯台の踊場等の改修は令和2年度予定されてお

り、一般公開が早く再開できることを切に願いつつ、灯台を通して地元との繋がりを大切にしていきたいと思えます。大野灯台は航海用の安全施設ではあります。が、地域に根付き愛される存在であることを改めて認識させられた心温まる思い出に残るエピソードとなりました。



(写真-11) 美保関灯台階段入口、同拡大写真

2020年 尻屋埼灯台及び入道埼灯台参観開始について

尻屋埼灯台

青森県



★尻屋埼灯台は下記の通り参観いたします★

参観期間 2020年4月25日(土)～
2020年11月3日(※)

参観時間 9時～16時

※4月30日までは9時～15時

灯光会尻屋埼支所 ☎ 0175-47-2889



尻屋埼の参観状況

入道埼灯台

秋田県



★入道埼灯台は下記の通り参観いたします★

参観期間 2020年4月18日(土)～
2020年11月3日(※)

参観時間 9時～16時

※4月18日～10月15日 土日等は
9時～16時30分

灯光会入道埼支所 ☎ 090-1931-9706



入道埼の参観状況



— 明治の灯台の話 (59) —

高根島灯台

灯台研究生

三原瀬戸8灯台の魅力

引続き、三原瀬戸の灯台です。今回の高根島灯台は、三原瀬戸の灯台で唯一、日本の灯台50選に選ばれている著名な灯台です。灯台の大きさは三原瀬戸の灯台でも最小クラスで、頂上までの高さ約4.5m（現在）は灯台50選の中で最も小さな灯台です。



写真1 夏の高根島灯台
(令和元年6月撮影)



高根島灯台は、広島県の高根島の北端にあります。

明治27（1894）年の設置当時は、前回紹介した大久野島灯台が保守管理する無人の灯台でした。

三原瀬戸の無人灯台には、明治期の他の灯台にはほとんど見られない大きな特徴があります。灯台の周囲に、白く塗られた石造の円形の囲いがあることです。大浜埼、小佐木島、中ノ鼻、廃止の鮎埼（写真2）の無人の全灯台と同じ囲いが見られます。灯台は低く小さいため、遠方から望むと、灯台よりも、この真っ白な囲いが目に留まります。このため、船舶から灯台を見えやすくするため、この囲いが備えられたとの説があります。また、職員が常駐しない無人灯台であったため、防犯上の観点から設置されたとも考えられます。



資料1 高根島灯台と各灯台の位置



写真3 韓国仁川港の小月尾島灯台
(当時の絵葉書)



写真2 旧鮭埼灯台
(昭和8年発行写真集「燈台」より)

三原瀬戸の灯台以降も、各地で無人灯台が設置されますが、熊本の上的島（明治30年）や韓国の小月尾島（明治36年・日本人設置（写真3））の無人灯台を除き、明治期に円形の囲いが付属する灯台は見られません。

更に三原瀬戸の無人灯台には、他の明治期の灯台では見られない不可解な特徴があります。灯塔の下部に貫通孔が開けられていることです。形状は中ノ鼻のみ四角形ですが、大浜埼、高根島、廃止の鮭埼灯台には、円形の貫通孔が灯塔の両側から開けられています。（写真4～7）

この貫通孔は、大浜埼、中ノ鼻、鮭埼の各灯台では、灯塔の内部に作られた物置の空間に通じていました。このため、物置の通風孔または水抜きであることが容易に考えられます。しかし、高根島灯台にはこの物置がありません。穴を覗いても、反対側の穴から差し込む光が見えるだけです。ライトで中を照らすと、灯塔の中央付近に多少広がりがあるように見えます。第六管区海上保安本部交通部整備課の最古参のT技術官によれば、建物の中の空気の流れをよくするための貫通孔と空間ではないかとの意見です。頑丈な石造建築でも、建築内部の空気の流れがなければ、劣化が進むとのことです。高根島灯台のどこにも繋がっていない貫



写真4～7 灯台の貫通孔

右上:高根島灯台、右下:大浜崎灯台、左上:中ノ鼻灯台、左下:旧緋崎灯台(撤去工事時の写真)

通孔は、この建物の劣化を防ぐためのものであるとの見解です。小型の灯台だけに見られるのは、大型の灯台には内部で十分な空気の流れが確保されているからとのことです。ただし、大浜崎灯台よりも小型の小佐木島灯台には、この貫通孔が見当たりません。どう見ても開けられていた痕跡もありません。なぜこのような矛盾が生じるのか、単なる小さな貫通孔ですが、円形の囲いと合わせて、まだ納得の答えが見つかりません。

また、三原瀬戸の灯台には、特筆すべき最大の特徴があります。灯台8基どれも同じではないことです。

同時期に建設され、一見すると、いくつかは同じ形状にも見えますが、すべて微妙に異なるのです。(資料②)

どの灯台かを判別するため、すべて異なる形状にしたとも考えられますが、小さく背が低いため、海上を行き交う船上からは、囲いに隠れた灯台のシルエットだけで、どの灯台か判別するのは至難の業です。高根島灯台だけは現在、燈籠が撤去され、LED灯器が灯塔の頂部に設置されているため、一目で判別できますが、他の灯台の微妙な違いは、図面上でようやく確認できるレベルです。設置が急がれていたにも関わらず、統一された規格ではなく、8基すべてが、それぞれ異



高根島灯台



鯨埼灯台



中ノ鼻灯台



大久野島灯台



小佐木島灯台



大浜埼灯台



百貫島灯台

三原瀬戸の8灯台(明治27年5月)



高根島 鯨埼 中ノ鼻 大久野島 小佐木島 大浜埼 百貫島 大下島



大下島灯台

資料2 三原瀬戸の全8灯台と外観図

なる仕様で作られていたのです。

三原瀬戸の8灯台は、明治期に重要航路の灯台として一斉に点灯開始し、華々しくデビューしましたが、高根島灯台をはじめとして、今では過疎化が進む瀬戸内海の小さな島で、ひっそりと佇む目立たない小型の石造灯台となっています。しかし、ひとつひとつには、様々な経歴と特徴があり、不可解な謎も多く、愚生にはそれぞれ興味の尽きない魅力ある灯台でした。

高根島通航潮流信号所の開設

明治43(1910)年4月1日、高根島灯台は廃止されます。高根島灯台の後方に高根島通航潮流信号所(写真9)が建てられ、高根島灯台は、信号所の付属施設となる高根島潮流信号塔になりました。この同日に、隣の大浜埼灯台も廃止され、同じように大浜埼通



写真8 高根島灯台 (明治37年3月刊行 燈台要覧より)

航潮流信号所が開設されています。

明治45年3月刊行の航路標識管理所第四年報には、当時各地に設置された信号所について、次のとおり紹介されています。(分かりやすくするため句読点等を付与)

新設の事由

下関海峡及び三原瀬戸並びに来島海峡航路は、屈曲狭隘にして潮流甚だ急なるにも拘わらず、大小船舶の交通は、年々其数を増加するの趨勢なるを以て、随つて衝突座洲等の危険尠なしとせず。是等通航船に対し前路の安否と潮流の方向緩急を予知せしむるは、航路の安寧を維持する緊急設備なるを認め、四十年より四十二年に至る三ヶ年度の継続工事として、四十一年五月其工を起し、四十三年三月を以て全部竣工せり。

位置

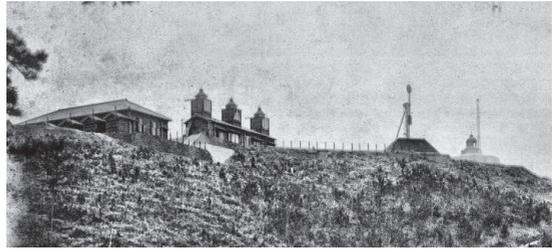


写真9 高根島灯台(右)と高根島通航潮流信号所
(燈光会保管 竹田関太郎氏寄贈写真より)

下関海峡・赤坂通航信号所

・ 台場鼻通航潮流信号所

豊前國企救郡

・ 火ノ山下通航信号所

長門國豊浦郡

・ 部崎通航潮流信号所

長門國下関市

来島海峡・中渡島潮流信号所

豊前國企救郡

三原瀬戸・高根島通航潮流信号所

伊予國越智郡

・ 大濱崎通航潮流信号所

安芸國豊田郡
備後國御調郡

高根島の信号所は、その名の通り、船舶通航信号と潮流信号の二つの信号業務を実施してまいりました。その概要は、明治43年5月15日付通信省告示第三百二十一号に次のとおり見られます。

内海三原瀬戸大濱崎及び高根島に信号所を置き、明治四十三年四月一日より明治四十二年七月通信省告示第六百七十三号及び左記の規定に依り、船舶通航信号及び潮流信号を開始す

一 信号所附近を航行する汽艇、発動機船及び小形汽船の動静に關しては船舶通航信号を為さす

二 船舶通航信号の意義は別表(資料3)に依る

三 潮流信号は布刈瀬戸に於ける潮流時期を示し、其の意義は左に掲ぐる所による

(別紙)

高根島			信號所種類	注
第一	第二	第三	西行船ニ對シテハ 東行船ニ對シテハ	意
大久野島以東ニ在テ東方ニ航行スル船アリ	能地堆以東ニ在テ東方ニ航行スル船アリ	高根島大久野島間ニ帆船群走ス	細島小佐木島間ニ在テ西方ニ航行スル船アリ	
細島小佐木島間ニ在テ西方ニ航行スル船アリ	小佐木島以西ニ在テ西方ニ航行スル船アリ	細島高根島間ニ帆船群走ス	夜間約南七十二度東ヨリ南ヲ經テ約南十八度西マテノ弧内ハ燈火ヲ遮蔽シ東行船又ハ西行船ニ對スル信號ノ變換區域ヲ示ス	

資料3

逓信省告示第321号別表に掲載の高根島船舶通航信号の種別

第一種 東流の初期又は末期

第二種 東流の中央期

第三種 西流の初期又は末期

第四種 西流の中央期

四 前項に於て東流と称するは安芸灘の方より三原瀬戸を備後灘の方に流るる潮流、西流と称するは備後灘の方より該瀬戸を安芸灘の方に流るる潮流を謂う

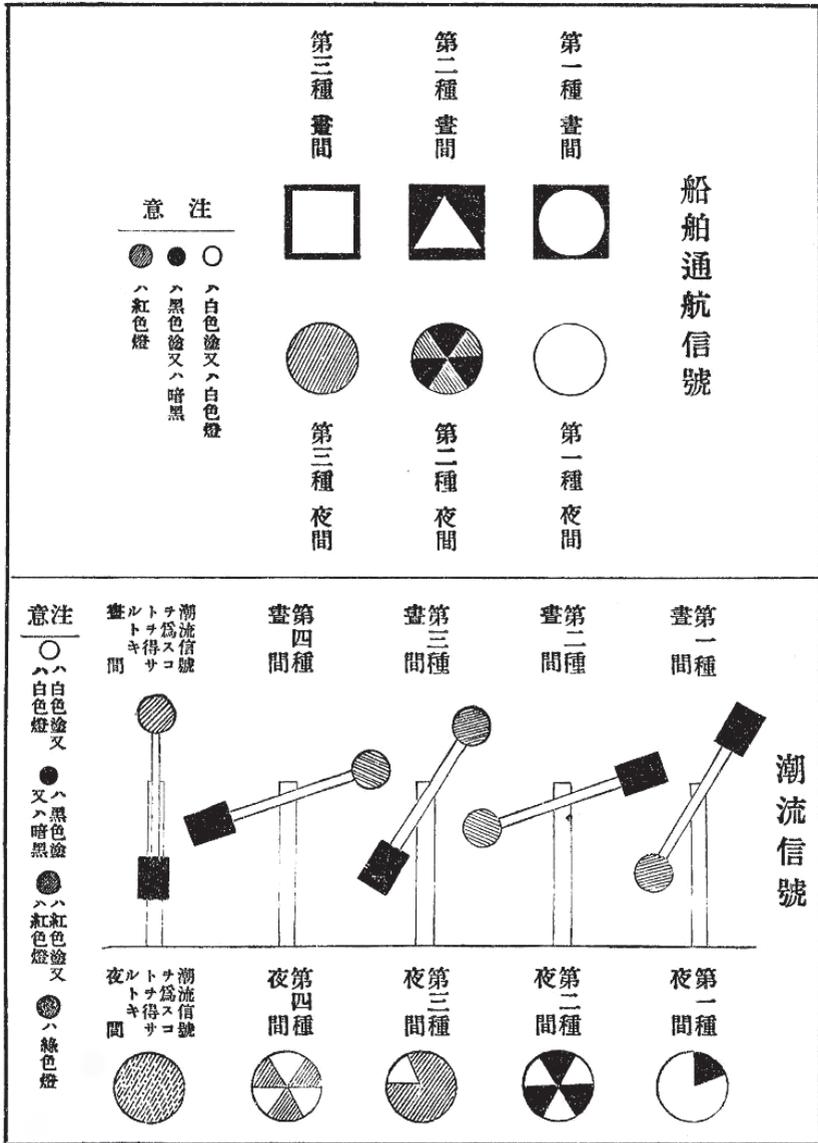
告示のとおり、船舶通航信号は3パターン、潮流信号は5パターンに分けて出していました。出し方は、逓信省告示第六百七十三号にある次表(資料4)のとおりです。

船舶通航信号は、新たに設置された木造黒塗りの信号所の三つの塔に、昼は表示板、夜は灯火にて表示さ

れました。次の写真(写真10)は、高根島と同型の大浜埼の通航信号所です。信号所の中央の塔に三角形の二種の信号が表示されています。夜の灯火信号については、この塔の最上部に点灯されています。写真では、塔の三角屋根の下が白く色が抜けている箇所です。

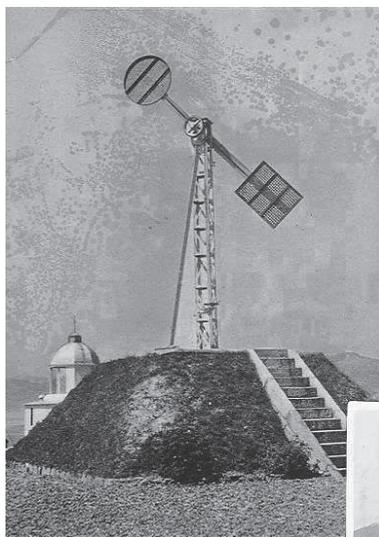


写真10 大浜埼通航信号所 二種の信号を掲示(燈光会保管写真より)



資料4 逓信省告示第673号(明治42年)の別表
船舶通航信号と潮流信号の種別

写真11 高根島潮流信号所の腕木信号
第三種の信号を掲示（燈光会保管写真より）



平成20年頃まで、来島海峡の中渡島及び関門海峡の火の山下にて使われていた腕木信号です（写真11）。愚生も海上保安学校時代、この信号について学び、乗船実習で現物を見た記憶が鮮明に蘇ります。夜の灯火信号は、明治期から昭和の20年代まで灯台が使用されてきました。表（資料4）のとおり赤と緑の光を交えて、状況に応じ5種類の灯火による信号を出していました。両信号の出し方（機器操作方法）については、長文になるため、稿を改めて紹介いたします。

高根島信号所の仕事と暮らし

高根島信号所が配置され、無人だった高根島灯台に職員が3名配置されました。高根島信号所の生活風景が、昭和17年10月愛之事業社発行の図書「燈臺」に見られます。著者の池田孝氏は、元職員で、尾道保安部保管の高根島灯台経歴簿を見ると、同氏が昭和2年6月から同4年6月までの2年間、高根島信号所に勤務したことが記録されています。図書「燈臺」には、池田氏が勤務した昭和初期の全国の灯台の生活風景が記され、高根島の章は、その中でも多くの誌面が占められ、多くの思い出に満ちていたことが分かります。信号所の仕事については、次のとおり見られます。

信号所には、潮流の方向や早さを知らせる潮流信号所と、一方の船に、反対の方面の船舶の動静を知らせる船舶通航信号の二種類があり、高根島では両方取扱つてゐる。

あの邊あたりにの潮の早いのは全く驚くほどで、大潮の中央期には急流のやうに音を立てて流れてゐる。

潮は六時間位で替るので、信号所では今の潮がどっちの方面に流れてゐるかを知らせるのである。

潮が替ると今まで潮待ちしてゐた帆船が、どこから出て来るともなく数限りもなく現れて来る。

面白いのは澤山の石炭船を曳いてゐる小蒸気船で、今まで勢よく走つてゐたのが、潮が反対に替ると同時に速力が段々鈍くなり、その潮の中央期頃になるとそろそろ後退りをはじめぬ。

そして潮が弱りはじめると、やれやれといったやうに又前の方に進みはじめる。

帆船は潮と風で動いてゐるので、風や潮のいい時には澤山のスクーナー型の帆船が見てゐても面白いやうによく走る。

順風になれば勿論のこと、逆風でもそれを利用して、あつちへ走り、こつちへ走りしてゐる。

よく衝突しないものだと思ふ。

それに、その狭い所に魚を釣る小舟まで散らばつてゐるので、汽船など歩けなくなつて、途中で停まつてしまふ事もある。

船舶通航信号所といふのは、そんな船の衝突せぬやうに向ふから汽船が来るとか、帆船が群走してゐるとかいふことを知らせる信号である。

それには、昼は信号所の屋根にある黒い塔の上に丸、三角、四角の白い標識を掲げる。夜はそれに相当した

燈光で知らせる。

帆船が数多く行き交つていた昭和初期の三原瀬戸の長閑な風景が描写されています。

ここに記載のとおり、船舶通航信号は当時、白色の信号標識板を目立たせるため、建物が黒く塗られていました。写真10の大浜埼船舶通航信号所は、令和の現在も、尾道市の歴史的建造物として当時の木造建てのまま残されていますが、真白に塗られている姿に、見るたびに違和感を覚えずにはいられません。

続いて、高根島信号所の暮らしの様子が見られます。

高根島信号所の官舎は急造のトタン屋根で、その上低い所に立つてゐる長屋だから、夏分などはとても暑くてやり切れなかった。その代わり、石段を上つて前の信号所のある所にゆけば、かなりの広場になつてゐて、景色もよく、とても涼しい。夏になるとよく、そこまですらやぶ台を持ち出して、夕食をやつたものだ。美しい瀬戸内の景色を眺めて、リンデンの葉の揺れる下で自作のトマトを齧りながら、ビール一杯も飲むのは全くわるくない。

買物にゆく瀬戸田の町までは一里以上もあり、何一



写真12 旧高根島信号所(上)と官舎(下)跡地
(平成31年4月撮影)

つ運ぶにも山坂を越えなければならぬ不便な燈台生活でも、こうした人の知れぬ楽しさもある。

記載の長屋風の官舎の跡や石段は、今日の高根島に公園化され残されています。石段を上った先の信号所跡も残されており、この文面をもとに当時の慎ましい暮らしぶりを、当時の痕跡を一つ一つ確かめながら回想することができます(写真12)。

高根島灯台は、島のみかん畑を見下ろす狭い坂道を

上った先にあります。当時の灯台の周囲の果樹園や、灯台の畑の様子は次のとおりです。

高根島はほとんど農家である。

それも主として果樹をやつてゐるので蜜柑やネーブルの時期が済めば桃、桃の時季が済めば西瓜といふ風に四季果物の絶ゆる時がない。

夏の朝、露を踏んで信号所の近所にある瓜畑に行き、夜気に冷くなつてゐる瓜を食べる。あの味は忘れられない。

官舎の傍にも素晴らしく大きな無花果の木があつて、盛りの頃にはその一本の木に何百といふ実がなる。

それを皆が筈ざるに何杯となく取つて食べるのだが、しまひには食べ飽きて水くみのぢいやにやるとか、その他来る人来る人にくれてやつたが、それでも捨てるのが多かつた。

今から思へば、全く勿体ないやうな気がする。大分老木だつたから、もう枯れてしまつたことだらう。

燈台はどこでも買物に不便なので、よく畑を作る。

私もその頃、形ばかりの畑を作つた。

尤も作つたといつても、殆ど家内いんないまかせて、朝、楊枝をくはへながら畑を廻つて歩いては何か講釈するく

らゐるもので、よく皆に笑われたものだ。

それでも赤坊と三人の小家族なので、トマトなどは喰ひきれぬほどだった。

高根島は今も住民の約八割が農家で、島の主幹産業は柑橘栽培とされています。灯台の手前にも、みかん畑が広がり、長閑な瀬戸内海の島の風景が堪能できます。しかし、この島も過疎化が進み、農作放棄された畑が目につきました。当時の記事を見て島の灯台に訪れると、荒れた畑や人が居ない灯台を見るたび、物淋しさと郷愁の思いが必ず込み上げてきます。

灯台生活の楽しみは買い出しと四季の収穫です。高根島灯台での知られざる楽しみも記されています。

高根で楽しかったのは松茸取りである。秋になるとよく皆で朝早くから出かけた。松茸の生えてゐるところへ来ると、とてもいい香りが鼻を突く。

土を割って勢いよく生えてゐる松茸をみつけた時はうれしい。

なかなかみつからぬものだが、いつか家内が赤坊をおんぶしたまま足を踏み外して山坂を五六間ほど滑り落ちたことがあった。

下で大きな声で呼ぶので、怪我でもしたのではないかと案じていつてみたら、五六本、大きなのが、かたまって生えてゐた。

買物は村まで一里ほど歩いて、二町ほどの渡しを渡り瀬戸田町にゆくのだが、高根と瀬戸田の間は狭いが海峡が長く続いているので、どうしても河としか思えない。

潮の早いときにはまるで急流である。

そんな時には、渡し船はこっちの岸をぐんぐん上流の方へ昇っていつて、潮に流されながら向かふに漕ぎ着くのである。

瀬戸田町がある生口島は、現在しまなみ海道（西瀬戸自動車道）が通じており、本州や四国から車で渡れます。瀬戸田町は、古くからの港町で古刹も多く、同島の中心地です。渡し船が通っていた瀬戸田水道には、昭和45年に高根大橋が架かり、高根島へも自由に行き来することができます。平成最後の春、愚生が初めて高根島灯台を訪れたとき、高根島灯台と信号所跡地は、満開の桜の大庭園となりました。

灯台の桜の悲話

高根島灯台は、灯台50選に選ばれてはいますが、小さ過ぎる灯塔にLED灯器が鎮座し、脇にはコンクリート造の構造物とソーラーパネルが配備され、一瞥しただけでは明治期の灯台が持つ古さも威厳も感じられません。その印象が強く、行く前には全く期待していませんでしたが、みかん畑の脇道を過ぎた先には、想像もしていなかった桜の大庭園に圧倒されました。雑草も取り払われ、官舎や信号所跡がはっきりと残された整地には、島の親子連れも花見に訪れていました。その親子から、桜の木に秘められた意外な事実を聞かされました。その桜は、島の小学校の廃校の記念に植えられていた桜の木だったことを。

平成8年3月、高根島の唯一の小学校であった高根小学校は、120年の歴史に幕を閉じ、瀬戸田小学校に統合されました。その2年前の平成6(1994)年、灯台点灯100周年の記念の年に、旧信号所と官舎の跡地を、前年の夏から親たちと一緒に整地し、高根小学校の生徒たちの手により、45本の桜の苗木が植えられました。その経緯が、平成8年3月31日に発行された記念誌「百二十年のあゆみ高根島」の中で、当時子

ども育成会の会長を務めていた小河章壮氏により次のとおり記されています。

平成八年の春より、瀬戸田町の五つの小学校が「瀬戸田小学校」として統合されます。高根小学校も創設一二〇年の幕を閉じます。そこで、「閉校までに、何か記念に残ることをしたい」と考えていました。

平成四年度より第二土曜日が休日となっています。

この休日に有意義な行事ができないものかとPTAの役員さんたちに相談しました。その中で「現在荒れている高根灯台をきれいにし、そこへ桜の木を植樹してはどうだろうか。子ども達が自分の手で植えた桜の苗木を自分たちで管理し育てていきながら、高根の島に愛着のもてる大人になってほしい。」という願いが出され、子ども会の行事として桜の植樹を行うことになりました。

子ども達と話し合いをする中で「なぜ、桜の木を植えるのですか。」「海岸から灯台まできれいな石段ができていたよ。」「灯台は草ボーボーだったのに、どうやって植えるのですか。」等の意見や質問が出されました。私達保護者は、高根小学校在学中に遠足等で度々灯台へでかけたものです。今の小学生達の中にも、灯



写真13 桜の苗木の植樹
(百二十年のあゆみ 高根島より)

台へでかけたことのある人が何人もいることが、この話し合いを通して分かりました。また、「全校生徒で桜の木を植えようと決まり、後で自分がどの木を植えたか分かるようにレンガに名前を刻み、木の根元に埋めることも決まりました。高根灯台について調べてみますと、明治二十七年五月に明かりを灯して、その年が丁度百年目といった偶然も伴いました。

高根小学校で育った子ども達が、将来立派な大人になつてくれることを桜の木は見守つてくれることでしょうか。

植樹されてから25年後の平成31年の春、桜の木はみな大樹となり、高根島灯台一帯は、見事な桜の大庭園に変貌していました。愚生が同地を訪れたとき、桜は

満開で、感動に浸り夢中で何枚もシャッターを切っていたとき、その秘話を聞かされ、それまであでやかに見えていた満開の桜が、瞬間に悲しく切なく愛おしく感じられたことが今も忘れられません。

新型コロナウイルスの感染拡大で世界中が騒然としていますが、今年も間もなく春が訪れます。そして、昨年と同じように高根島灯台は、桜の園に覆い尽くされるはずです。小河様、島から育つていった子供たちは勿論、愚生も高根島灯台の桜の木々を、いつまでも忘れずに見守り続けることでしょうか。



写真14 満開の桜と高根島灯台
(平成31年4月撮影)

今回の執筆にあたり、記念誌「百二十年のあゆみ高根島」を提供していただいた高根島の榎村廣郎様に、この場を借りてお礼申し上げます。

魁よみがえった今治港の燈明台

灯台 研究 生

愛媛県の今治港は、港内が第一区から三区までに分かれ、第三区は地方港湾「波止浜港」となっています。波止浜港内には現在、今治造船、新来島どつく、浅川造船、檜垣造船の日本の名だたる造船所が、港内狭しと、ひしめき合って稼働しています。その港口には、来島海峡に面した小島おしま、来島を控え、波止浜港は古くから来島海峡を通航する和船の風待ち潮待ちの港として栄えてきました。江戸期には、塩田が開発され、さ



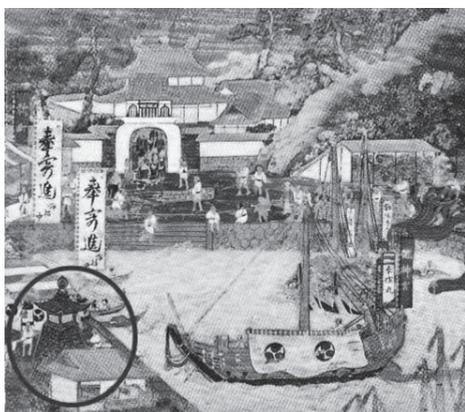
波止浜港の位置図

らに船の出入りは増え、港一帯は「伊予の小長崎」と呼ばれた程でした。

船の出入りで賑わう波止浜港の様子は、慶応3（18

67）年に波止浜龍神社に奉納された絵馬にも見られ、その中に今回の燈明台が描かれています。

今治の地域史研究家の大成経凡氏によれば、燈明台は江戸後期の嘉永2（1849）年に、波止浜町の町年寄5名らにより建造されました。花崗岩の切り石積みで、高さ約6メートルの堂々とした本体は、建立から170年の時を経た今も、風化の兆しは見られませんが、元は、船の出入りを監督する「船番所」に置かれていましたが、明治期に同地が造船所の造成にかかる埋め立て工事のため、明治35（1902）年に現在地



波止浜龍神社遷宮祭礼図
(龍神社所蔵・大成経凡氏提供)

へ移されたとのこと。移設費用は、波止浜町の資産家であった八木亀三郎と矢野嘉太郎の両名が出資し、今日の燈明台には彼らの名前と移設の年が刻まれています。

燈明台が、いつまで点灯していたのか記録はなく定かではありません。令和元年の師走、年が押し迫った暮れに、長年の時を経て、この燈明台に明かりが再び灯されました。甦よみがえった明かりは、燈明台の近くに住む篤志家の71歳の男性の手により灯されたものでした。この事実が、令和元12月26日付の毎日新聞ほかに取り上げられ、記事には次のように紹介されています。

「今回、点灯を思いついたのは波止浜に住む匿名の男性。取材に「灯がともるとすてきでしょ。人が来てくれるといいですね」と話す。この秋、燈明台を管理する市を通じて、土地所有者の県と交渉。「ぜひやってください」と快諾を得て、占用許可条件の変更申請も県に認められた。

まずは広島県福山市・鞆とらの浦に足を運んだ。点灯して観光シンボルとなっている石造りの常夜灯（1859年建造）がある。点灯イメージを確かめ、それを基に明かりの部分の木枠・ガラスを発注して、LED（発

光ダイオード）電球を入れた。

男性は工事費、電気代を全て持つ

が、「請求はまだ来てないんよ」と多くを語らない。

9月ごろ、試験点灯して住民らの感想を聞いた。いつもは暗さが目立つ

一帯に温かい光が広がり、「生まれ

て初めて見たよ」「嫁に来てから初めて」と70歳の夫婦に感激されたという。築造170年の燈明台は今後、「波止浜のランドマークタワー」（別の地元男性の声）としてさらに親しまれそうだ。

この燈明台の明りについては、港内の船舶の航行に影響を及ぼすものではないことが、今治海上保安部交通課長により確認されていることを申し添えます。



点灯する今治港（波止浜港）の燈明台



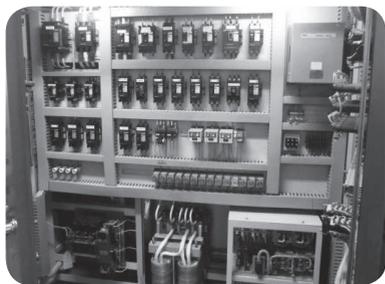
関門海峡海上交通センターニュース

関門海峡海上交通センター



海上交通センターの運用不能を防いだ！
～海上交通の安全を賭けた技術官の奮闘～

11月15日、16日、関門海峡海上交通センターの海上交通システム中枢が運用不能となるどころ、技術官らの活躍で回避することができました。



非常用発電機制御盤とエラー表示

用発電機が停止しないことを確認しました。電源設備の異常と判断、技術官らは現場に急行して、即時に手動による非常用から商用への電源の切り替えや発電機の停止などの応急処置を行いました。翌日には原因を究明し電源設備の故障した部品の交換と調整を行い自力復旧させました。

関門海峡の海上交通システムの中核である台場鼻レール局や潮流信号所を停止させることなく安定運用させることができました。

このことが、関門海峡海上交通センターの業務に大



記念写真：写真前列左より高倉技術官・河野主任技術官・木戸主任技術官

大きく貢献したことに、さらに、旺盛な業務意欲と高い技術力を持って取り組んだその行動が他の職員の範となることから、対応した、木戸主任技術官、河野主任技術官と高倉技術官が12月2日、所長褒章を受賞しました。

これからも、関門海峡海上交通センターの技術官は、日々の前向きな対応と技術の研鑽で海上交通センターを支えます。



台場鼻潮流信号所・レーダー局



監督者資格の認定審査を実施

統括運用管制官を目指して

11月26日、本年度第1回目の監督者資格の認定審査が実施されました。

監督者資格は、統括運用管制官に必要な資格です。統括運用管制官は運用管制官を指揮監督する立場

で、管制官の経験のみならず、関係法令や通達を熟知した限られた運用管制官だけが就けます。

審査は、「海上交通センター運用管制官等資格認定実施要領」にもとづいて実施されます。今回は、本庁交通部航行安全課交通管理室端山専門官が、審査対象者の黒崎主任運用管制官の監督者としての知識と技能を審査します。

黒崎官は副班長として統括運用管制官を補佐し、関門センターで8年の経験があります。

審査までには、海上保安学校門司分校で2週間の統括運用管制官課程、その後1ヶ月間の監督者研修を履修し、関係法令や通達、機器操作、英語力等の数十項目の7割以上を優秀の評価で習得する必要があります。

研修を、問題なくクリアしましたが、審査には万全を喫して臨みたいとの強い希望から、事前にプレ審査を実施すること



プレ審査（山縣統括官（手前）、黒崎官（右））

としました。

プレ審査は、山縣統括運用管制官が実施、3時間に渡る特訓で、苦手な分野が洗い出され、終了後には黒崎官は、疲労からぐったりとしていましたが、瞳の奥には審査に臨む自信が感じられました。

本番の審査は、七本部の航行安全課長と管制システム指導官、宇都宮次長や小野運用管制課長に見守られ、張り詰めた雰囲気で行われました。

初めの、口頭審査で、「衝突予防法」や「海上交通センター運用管制業務実施要領」など関係法令の知識が評価されました。次に、運用審査で、英語の情報提供、シミュレーション形式の船舶動向監視、班員への指導や指示などの技能が評価されました。

最初、緊張で対応に時間がかかっていましたが、徐々に日頃の業務で培った経験や知識をフルに活用してテキ



審査(端山専門官(手前)黒崎官(右から2番目))

パキと対応、2時間で終了しました。

12月3日、本庁交通部から審査結果、「認定」の通知がありました。

監督者資格を得て、ようやく統括運用管制官への道のスタートラインに立ちました。今後、どんな困難が待っているか分かりませんが、研鑽を重ね、将来すばらしい統括運用管制官として、関門海峡の航行安全に寄与するリーダーに育つことを職員一同が期待しています。



危機一髪！大型コンテナ船の乗揚げを回避！
運用管制官の奮闘！

11月28日、11時50分頃、運用管制官が山口県宇部港沖で大型コンテナ船の乗揚げを危機一髪回避させました。

運用管制官は、阪神港大阪区から釜山港をめざし山口県宇部港の下関南東水道を西航中のシンガポール船籍のコンテナ船、長さ277m、65792総トンの針路が浅瀬に向っていること気付きました。このため、当該船舶の喫水を確認し、即座に主任運用管制官に報告、継続監視を行うも針路変更の兆しが無い為、「前

方に浅瀬があることから位置と針路を確認せよ」と英語で警告を行いました。しかし、針路や速力に変化がないことから、更に2回の警告を行った結果、ようやく浅瀬の直前で停船、後進後、変針して乗揚げを回避、安全な水域を関門航路に向って航行しました。

関門航路の入り口である下関南東水道で、もしも乗揚げれば、関門航路への出入りの規制だけでなく、油の流出による漁業への被害等に発展する恐れがありました。

これは、運用管制官が連携して、監視の目を光らせ続けたことで、大規模海難を防ぐことができた好事例で、12月3日、七本部交通部長から賞詞電を、12月4日、高橋統括運用管制官率いる当直第1



11月28日 事案発生時の航跡図

班は本庁航行安全課長から賞詞を頂きました。また、12月19日、当時の運用卓で監視と情報提供にあたった松下運用管制官は所長褒章を受賞しました。

今後とも、関門海峡海上交通センターは、日々のV-TRM訓練(VESSEL TRAFFIC TEAM RESOURCES MANAGEMENT RAINING)などで運用管制官の知識と技能やチームワークの向上による海上交通安全の確保に努めます。



所長褒章受賞



本庁航行安全課長賞詞受賞



感謝状贈呈

〓 運用30年の感謝を込めて〓

令和元年6月1日、関門海峡海上交通センターは運用30年を迎えました。

これまで海上交通センター業務や海上交通の安全確保に御協力頂いた7団体 3個人に感謝状を贈呈いたしました。

・公益社団法人 西部海難防止協会

関門海峡海上交通センターの設置構想時から現在まで、海上交通安全に関する様々な調査・研究結果と関係者の意見を取りまとめた提言ならびに関門海峡マリンガイドの発刊への協賛による海上交通の安全確保

・関門水先区水先人会

関門海峡の船舶の嚮導による海上交通の安全確保及び操船シミュレーターを使用した共同訓練による運用管制官の技能向上

・下関市

火ノ山レーダー局及びAIS陸上局用地提供による関門海峡の海上交通の安全確保



関門水先区水先人会



日本無線株式会社 九州支社

・西日本高速株式会社 九州支社

早稲信号所及び火ノ山下潮流信号所潮流観測施設用地提供による関門海峡の海上交通の安全確保

・日本無線株式会社 九州支社

AIS陸上局の整備・管理による海上交通の安全確保

ラジオ工作教室の開催による海上交通センターの地域への理解促進

・株式会社大島組 北九州支店 有限会社小倉マリーナ

海上交通センターの工所用及び一般公開の駐車場用地使用承認による海上交通の安全確保

・個人1
厚狭レーダー局用地提供による関門海峡の海上交通の安全確保

・個人2、個人3
台場レーダー局及び潮流信号所の通行用地使用承認による関門海峡の海上交通の安全確保



海の管制官の体験型職場見学会 ～受験生の進路決定前の時期に～

令和2年2月1日、体験型職場見学会を開催し、海上保安学校の管制課程を志望又は興味がある高校生2名、中学生2名と保護者2名が参加しました。

募集活動は、年間を通して計画的・定期的に活動することが大切で、特に、来年度の受験生が進路を決定する前のこの時期が効果的として開催しました。

これまでの活動で管制課程の知名度が非常に低いと



有限会社小倉マリーナ

感じていました。又、今年度の見学会に参加した高校生10名の内5名が保護者同伴であったことから、進路決定に保護者の影響が大きいとも感じていました。

そこで、公的な媒体を利用して広く見学会を周知し海の管制官の知名度を向上させるとともに、保護者の心も掴む戦略を立てました。このため、海上交通センターのホームページはもちろん、海保ツイッターの活用や職員の人脈を最大限活用し、北九州市と下関市の担当職員に働きかけ、市報への掲載を試みました。見学会では、最初に、宇都宮次長が関門海峡海



運用室の見学



業務概要を説明する宇都宮次長

上交通センターの業務の概要を説明しました。

次に、運用室で関門海峡航路の運用管制、潮流信号や早朝管制信号業務などを見学しました。日本語や英語で忙しく交わされる船との通信に驚くとともに、刻々と変化するレーダーやA I Sの画面に興味津々でした。そして、訓練装置を使用した運用管制官の体験です。

金崎主任官の指導の下、高木官と矢野官のデモンストレーションを見たのち、学生たちは緊張をし



学生を指導する高木官



学生を指導する矢野官、金崎主任官

ながらも、無線を使い中学生は日本語で、高校生は英語で情報提供を行い、船舶同士の衝突を見事回避しました（シミュレーション訓練）。

さらに、屋上で、雄大な関門海峡を通峡する大型船や関門橋の風景に感嘆しました。配布資料には、各種パンフレットのほか、過去2年分の管制課程の採用試験問題も加えました。

アンケート結果によると、学生からは「重要な仕事だと実感した」「実際に経験して興味が湧いた」といった声が、保護者からは「やりがいがありそう」「普段目にするのでできない現場を見ることができ感動した」といった声があり、回数を重ねるたびに参加者からの一定の評価を得られていると実感しました。

また、今回は新聞2社からの取材申し込みがありました。翌日の誌面にはカラーで大きく取り上げられ、社会的な関心の高さもうかがえました。



新聞記者の取材を受ける中高生



講座 関門海峡の船の管制を
見学・体験してみよう！

海の管制官を目指し、海上保安学校管制課程へ入学志望が興味がある中学生や高校生を対象に、関門海峡海上交通センターの体験・見学会を開催します。※中学生は要保護者同伴

■ 2月1日(土) 午前10時～正午、午後1時30分～3時30分 ①関門海峡海上交通センター(北九州市門司区松原二丁目) ②1月28日(火)までに、電話で関門海峡海上交通センター(☎093-381-6699)へ。
③1月28日(火)までに、電話で関門海峡海上交通センター(☎231-9333)

下関市報への掲載



募集

「海の管制官の職場見学会」の参加者を募集

関門海峡の船の管制の見学と体験など。2月1日(土)10～12時と13時30分～15時30分、関門海峡海上交通センター(門司区松原二丁目)で。①中学・高校生(中学生は保護者同伴)。②1月28日まで。詳細は同施設☎381-6699へ。

北九州市報への掲載

関門海峡海上交通センターは、これからも、年間を通して計画的・定期的に広く募集活動を行います。また、地域に寄り添い海上交通センターや海上保安庁の理解促進に努めます。

樺太中知床岬灯台最後の灯台守・降籓利勝さん
敗戦後サハリンで過ごした僕（長男）の少年時代 降籓信捷さんの手記（抜粋）

手記 降籓 信捷（ロシア語）
翻訳 小山内道子

第5回（最終回）

ソ連での職業生活のあれこれ
「スポーツ」

軍隊から戻った後も僕は趣味のスポーツ、重量挙げのトレーニングを続けていた。ポロナイスク市はこのスポーツ種目で名を挙げていた。製紙工場には体育館があり、仕事が暇な時間にはここでトレーニングを行うことが出来た。重量挙げクラブのチームがあつて、メンバーには何人かスポーツマスターや第一級の選手たちもいた。この競技については毎年ポロナイスク大会、次にサハリン州大会、極東大会など、チャンピオンを目指す各段階の試合が行われた。僕も最軽量級クラスの試合に出場していたが、1968年、サハリン州チャンピオン大会に出場しチャンピオンになったの

である。このスポーツをやっていた時期、僕はチームの一員として様々な都市へ出かけた。ユジノサハリンスク、ウラジオストク、オルジエニキーゼ（北オセチア）などの都市で全ロシア・チャンピオンシップを目指して戦ったのだ。マガダンにも行ったが、そこでは5月でもまだ冬で、吹雪に見舞われたりした。マガダン市には、ソ連邦全体で有名な素晴らしいスポーツ施設があつた。

何らかのスポーツをやっていて選抜チームに属していると、ちよつとした特権があつたのだ。試合が始まる約1週間前には仕事から解放されてトレーニングや休息、いろいろな準備に専念する。交通費はスポーツ委員会が負担してくれ、1日3度食堂で食べられる食事券も支給してくれるのだ。また、試合出場期間の休業についても会社は平均給与を支給してくれた。僕は大体30歳位まで重量挙げに携わっていたが、さまざま

な事情から少しづつ遠ざかっていった。しかし、冬季はクロスカントリーで何十キロも走っていた。

〔学習と研修制度〕

中等教育は当初10年制だったが、その後11年制となった。企業に勤めている人全員に、中でも若い人に学習を続けて中等教育11年まで修了するようにと強く奨励されていたので、僕は1969年9月、勤労青年のための夜間学校に入学した。当時夜間中学へ通ったのは、年配の人たちもいた。僕は1970年6月、全科目の卒業試験に合格して、中等教育の卒業証書を授与された。卒業証書の成績は4と5で「優等生」の評価だった。数学と物理については優秀賞を受けた。

その後専門の勉強も続けて1972年3月、入試委員会の試験に合格し、第5級の電気組立・修理工となった(専門職では6級が最高)。5級というのは専門技術者で、独立して仕事が出来なければならない。すなわち、熱併給発電所の電気器具制御の複雑な回路、制御パネル、自動警報装置、ボイラー装置電気計測機器、電流計、電力計等々を理解していて、不具合があれば原因を突き止めて取り除くのである。我々の部署はコンピュータ全体とその中の各作業場全部を管理・

担当しており、継電器保護調整装置、電気エンジン、電気モーター、高圧変電器、発電機、高圧スイッチ送電線管理に従事していた。

1972年、僕は森林・木材加工産業省の林業技術専門学校に入学した。通信教育部で、専攻は「工業企業における電気プラント」である。技術専門学校を卒業するには3年間学ぶ必要があった。学校が我々に定期的に学習課題を送付してくるが、我々はそれを学習し、回答を書いて送り返すのである。そして年2回、エジノサハリンスク市へ期末試験を受けに行くのである。学校から送られてくる学習課題を遂行するために図書館へ通い、課題に添って技術書を探して読み、研究するために夜中まで何時間も専門書にかじりついていた。その年、僕と同じく製紙工場からこの学校に5名が入学していた。1975年4月、我々はこの技術専門学校を卒業し、電気技術資格習得の卒業証書と胸章を授与された。

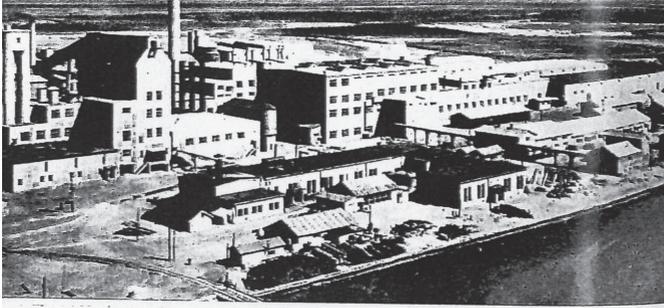
また、会社からは1974年8月、僕はハバロフスク市で行われた1ヶ月の研修コースに派遣された。講座終了後、指導的工業技術者としての全連邦大学資格向上講座履修証書と胸章が授与された。これは作業現場の電気計測機器の所轄官庁による確認申請における

生産品質の規格化と度量衡法に関する分野の研修だった。この履修証は、修理が行われた機器について、その機器が定められた精度に適合するという検印を僕の判断で押すことができることを意味するのである。

1986年5月には、僕はレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）

バルブ・製紙工業大学のエネルギー産業専門家のための1ヶ月研修コースへ派遣された。

この時僕はネヴァ川河岸に皇帝ピョートル一世によって建設された当時の首都を初めて、つぶさに知ることになった。西洋文明の建築物が保存されている大へん美しい都市である。ここには多くの歴史的な博物館、公園、大きなデパートがある。僕はレニングラー



戦前の日本人絹パルプ株式会社敷香工場（部分）

ドで自分用のスーツと夏用の帽子、それに冬用のリスの毛皮の帽子を購入した。他にサハリンでは買えない窓用の網、オートバイ用の部品あれこれとバッテリーを買った。

僕たちの滞在中に5月9日「勝利の日」の祝日があった。この日の夕方僕たちはネヴァ川上空に打ちあがる花火大会を見物に行ったが、それは素晴らしいものだった。また、夜の間にネヴァ川にかかっている何トンもある多くの橋が開いて、大きな船がここを通過していくのを眺めた。博物館に行った時、僕は展示物の中に像の骨で作られた日本の「ネツケ（根付）」を見た。

「休暇制度、特典、自然の恵み」

企業で働いている労働者には毎年有給休暇が与えられる。サハリン州は気候条件が北方圏と同等な条件となるので、大きな特典がある。一つは休暇の長さにおいて、また、給与の計算においてである。時間当たりの賃金査定率は1.4倍となっていて、さらに1年間の労働賃金総額の10%の加算金が付けられるのである。この加算額は最高50%まで認められる。また、休暇については、総計では1年間の勤務に対して継続し

て取れる休暇は平均30日となる。労働環境が有害な企業（酸化物を扱う作業場など）では、さらに休暇日数が加算されるのである。

休暇は毎年必ず取得しなければならぬわけではない。3年分までを積み立てて90日間、つまり3ヶ月休むことも許される。僕が職場の休暇予定表で冬から春に休暇を取ることに決まった時、僕は休暇中には氷下の冬釣りに出かけたものだ。釣ったのはコマイ、キウリ、オオカミウオ、チェカ、時にはカジカ、カレイ類、カワメンタイがかかることもあった。

夏休みの期間には時々黒海沿岸のクリミヤ半島に保養に行った。交通費は3年に一度は企業が支払ってくれる。これもまた、サハリン人にとつての特典である。その頃までに、姉のケイコはモスクワ国立大学を卒業し、結婚して、クリミヤ半島のシンフェロポリに住んでいた。さらにその後、妹富美子と和子もクリミヤに出かけて行って住んでいた。クリミヤは黒海沿岸に延びる半島で、特にサハリンの人々、北方地域の人たち、また、その他すべての人々の保養地になっている。皆、黒海沿岸の暖かい海で甲羅干しをし、オレンジ、桃、サクランボ、ブドウなどの新鮮な果物を食べながら休暇を過ごしたいと望むのだ。黒海沿岸には「休息の家」、

サナトリウム、「政府の家」などが多数立ち並んでいる。ここには冬というものはなく、雪も降らず、照り輝く太陽の日々が続くのである。

サハリンの秋は1年で最も良い季節だ。ベリー類を集め、キノコを採って、冬の保存食を準備する季節なのである。秋に休暇を取ると、僕はベリー類を取りに出かけるのが嬉しかった。ベリー類は月毎に次々に熟してくる。8月には丘陵地帯でクラスニーカが熟して赤くなる。クラスニーカはサハリンの野にだけ生育する有難いベリーで、菓子類の材料に使われる他に、飲み物にもなる。

9月の初めにはコケモモが熟してくる。これも大へん良く知られていて、ベリーでは人気がある。コケモモは山林にある草地や丘陵地で陽の光がよく注いでいる場所に生育する。コケモモからは一般にジャムを作るが、果実酒にもなる。

9月の終わりにかけて湿地帯の草炭地に次に熟してくるベリーはツルコケモモである。このベリーは集めるのに一番苦労が大きかった。このベリーがある場所へたどり着くには10キロ以上も歩いて行くからだ。ツルコケモモは大へん高価なベリーとされ、菓子工場が買い取っていた。キセーリという飲

み物が作られるのである。

最も遅く出てくるのはチエルニーカ(黒スグリ)だ。9月の末に熟してくるが、黒スグリは普通ジャムにする。黒スグリのジャムは栄養価が高く、長期間保存できる。発酵して酸っぱくならないのだ。含まれている何かバクテリアのお蔭らしい。

父の発病、そして他界

既に年金生活者になっていたがまだ働いていた父は、1975年4月、仕事を離れた。そして娘が住ん



若い頃の利勝夫妻と娘たち

でいるクリミヤのシンフェローポリへ出かけ、しばらく休養した。クリミヤから帰ると、仕事することに慣れ親しんでいた父は、再び以前の家族ともいべき仕事集団の部署へ復帰した。仕事集団で父は高度な知識を持つ専門家として全面的な尊敬を受けていた。父

は仕事上ではたびたび表彰され、父の写真は製紙工場の模範技術者としていつも表彰板に掲げられていた。

1978年5月初旬、父は体調不良を訴え、工場内の医療所の内科医を受診した。診察の結果は重大なものだった。肝硬変という不治の病だったのだ。ユジノサハリンスクの州立病院へ行き、すぐに検査入院となり、2週間を過ごした。既に病状は重く、痛みもひどくなっていた。少しでも痛みを和らげるために、麻薬注射が行われた。

こうして短期の治療の後、結局、1978年8月12日、父は65歳の生涯を閉じた。自分の家で子ども達と親族全員に看取られての



1978年8月、降旗利勝の葬儀、出棺の時



降旗利勝の葬儀、墓地までの葬列



ポロナイスクにある降旗家のお墓
信捷と姪のナースチャ

最後だった。

お葬式には工場全体から職場の同僚が、またポロナイスクに住んでいる日本人の知人たちも集まって、最後の旅立ちを見送った。

父はポロナイスク市の区域内にある古い日本人墓地にロシア人の習慣に従って葬られた。

た。(土地の広いロシア、特に田舎では今も昔ながらに土葬が行われる。―訳者)

これは参考までに付け加えたい。父は休暇中も旅行することもなく、油絵を描いていた。生涯を通して趣味の絵画に打ち込んでいた。そしていろいろな絵画展に出品し、様々な賞を受賞、父の多くの絵がユジノサハリンスク美術館の絵画コレクションに保存されている。また、母の肖像を描いた絵は「ソ連邦絵画展」で入賞し、N・クループスカヤ記念モスクワ国立教育大学に飾られているという。

父のことでもう一つ付け加えたいことがあります。

ポロナイスクに移

住してから5、6年たった頃からだと思いますが、両親は日本に住んでいる親せきの人たち、自分の母親や、兄弟姉妹と文通をしていたようでした。(僕たちは日本語が読めないのので手紙には関心を払いませんでした。)

手紙は相手に届くまでにとっても長い時間、1月半か2月以上もかかっていたが、手紙のやり取りは続けていたようです。そしていつだったかあるとき、父は日本へ行って自分の年老いた母親や兄



追憶の富士山を描く父・利勝



風景画を描く父・利勝

弟に生きているうちに会おうと思いい立ったのです。そのために父はモスクワのソ連外務省へ出国ビザを申請する手紙を出しました。その日から父は毎日ビザの到着を待ちわびていました。何日も過ぎてしまい、さらに何か月かが過ぎていきました。しかし、返事は来ませんでした。ビザの申請をした日からのくらしい経つたか正確には言えませんが、父はついに長いこと待っていたビザを受け取ったのです。しかし、ビザを見て、ビザの有効期限が既に終わっていることに気が付いた時、父の落胆はどんなに大きかったでしょう。結局日本への出国は実現しませんでした。……このことはソ連政府が事前に考案した出国禁止の措置だったのではないのでしょうか。

このようにして「鉄のカーテン」で遮られた。共産主義の収容所からの出国の試みは完全に終わったのでした。父はそれ以後もはや二度と出国ビザを申請することはありませんでした。それが父にとってどんなに辛いことだったか、当時の僕には十分想像できなかったと思います。

僕の新しいアパート

1988年の秋が近づいたころ、僕にも完成された

ばかりの設備の整った住宅（アパート）に入れる順番が回ってきた。このアパートは2年から2年半かけて建てられたのだが、僕が住んでいた長屋住宅のすぐそばにあった。順番に建てられる新しいアパートは、僕たちの長屋と菜園のある場所に建設されることになっていた。したがって、僕の住んでいた家が取り壊しにあうことになったのだ。

僕に割り当てられたアパートは2階にあり、1Kつまり部屋一つに台所で、ベランダがついていた。部屋は大きいものではなく、11平方メートルだった。役所の住宅基準では、一人当たり9平方メートルとなっていたから、僕の住まいは2平方メートルだけ基準より広かったといえる。素晴らしい台所で、料理を作るにはオーブン付きの電気コンロがあった。トイレはお風呂と一緒にあった。ベランダについてはいろいろ手を取らなければならなかった。窓枠を注文して、サイズを合わせて、ガラスをはめ、床を張って、ペンキを塗るなど、部屋になるように手を加えたのだ。

地下にある広いスペースを希望者は物置として利用してよかった。もちろん、僕は希望して物置を持つことにした。僕は金属製のドアを注文し、部屋のように囲ってドアをつけ、しっかりカギをかけた。

しかし、この物置は長くは使えなかった。というのは下水の水が地下室にあふれ出し、ブロックで囲っていた壁は壊され、金属性のドアも水たまりの中に倒れていて、中のものはみな流されたり、めちゃくちゃになって失われてしまったのだ。(これは工事の設計ミス、いい加減さを暴露するものではなかったらうか。―訳者)

僕のジャガイモ畑

1980年ごろサハリンでは大洪水があった。3日間も豪雨が続き、ソフホーズの畑地は洪水に見舞われ、川の水位がどんどん高まって川沿いの住宅や橋は氾濫水に流された。この年の洪水は全サハリンで同様の状況になり、甚大な被害が出たのである。

その年は収穫ゼロに近い状態になった。ジャガイモ畑がすっかり水に浸かったからだ。

この大洪水の後、市執行委員会(市役所)は市にある全企業に対してジャガイモを植え付けるために畑地を配分した。僕たちの製紙工場にはガスチューロ(内路)とチエフメネーヴォ(内川)の間の市から約35キロにある土地が配分された。もちろんそこにジャガイモを植えたのは希望者だけだった。僕はジャガイモを

植える希望者のリストに登録したが、その登録者には共用の広大な畑地に0・3ヘクタールずつの区画が配分された。そしてジャガイモの植え付け、除草、土寄せ、収穫と決められた日には企業がいつもバスを出して、畑地へ行く交通手段を保障してくれた。

僕はこの畑で約4年間ジャガイモを作り、収穫した。しかし、この畑のジャガイモの収穫は良くなかった。問題は、この畑にはムシが発生したからである。このムシはハリガネムシと言い、ジャガイモに穴をあける。だから収穫の半分は捨てざるを得なかったのだ。

このことがあってから、僕はジャガイモをもつと町に近い(町から約3キロ)家畜ソフホーズに配分されている土地に植えることに決めた。僕は空いている小さな土地を見つけて許可を貰いジャガイモを植えた。この土地は、しかるべき標準の畑にするには特に草取り等、多くの労力を何度もつぎ込む必要があった。

1991年、ソビエト社会主義共和国連邦が崩壊した後、ソフホーズは無くなってしまった。そして私有地による農業経営が現れた。市執行委員会では国有地を企業に別荘地として配分した。製紙工場はレオニードヴォ(上敷香)村の丘陵地を別荘用地として配分した。そこで僕はその土地を見に出かけて行き、その一

区画を貰うことにした。しかし、実際は雑木林のような土地を切り開かなければならないこと、家から25キロも離れた場所だったから、僕は結局別の選択をした。町から近い所に草茫々の打ち捨てられた畑があった。

ここは以前ある日本人の家族が農業を営んでいて、家があり、牛と馬を飼っていた。しかし、時が経つにつれてこの家族の人たちは年を取り、老人は亡くなつて、若い人たちは街へ引越してしまった。無人となった家屋は、いつだったか、火事マニアに燃やされてしまった。

僕は春になつて、この丈の高い雑草に覆われた土地を熊手で掘り起こして、開墾した。数日かかって4アールくらいの土地を畑として使えるように手入れした。畑には塀を作り、建築材を運んできて、休憩用に小さな小屋を建てた。畑のそばをポロナイ川に流れ込む小川が流れていた。この川では、産卵のために上ってくるマスを捕ることができた。

もしも、出来上がった収穫前の作物を掘り出して持ち去るとか、収穫物に害を加える人々が現れなければ、僕の畑に関してはすべてうまくいったといえただろう。

しかし、実際は収穫物盗難をめぐる事件が起こった

のだ。ある日、収穫期のジャガイモを持ち帰ることができず、畑に残したまま帰ったことがあった。すると、翌日には全部掘り起こされ持ち去られていた。つまり、それまでのすべての労働が全く無駄になったということである。とにかく誰かがいやがらせに損害を与えたのだ。

そこで畑の監視をせざるを得なくなった。仕事が終わるとすぐに畑へ行き、23時過ぎに家へ帰るのである。そのためにはオートバイを使った。

8月になってジャガイモが熟して収穫期を迎えたころ、事件が起こった。夜中にジャガイモを掘り起こしに1台の車がやって来たのだ。僕は熊手をもって車に近づいて、車のナンバーを書き留めて、追い払った。その後警察へ届け出て、車の持ち主に今後同様なことがないように警告してもらった。

泥棒との「武力衝突」さえ起こったことがあった。僕は自分の畑だけでなく、隣の畑の監視も引き受けていた。確実な警備をするために、僕は小銃と巨大な塩類を装填した弾薬筒を持参した。もちろん、僕は実際に泥棒に発砲するつもりはなく、単に脅しに使うつもりだった。

(以下に述べられている泥棒との「武力衝突」の話

劇の詳細は非常に面白いが、紙幅の関係で割愛する。
— 訳者 —

妹の死、そして母の病氣と死去

僕たちの家族では、1988年、妹の和子が脳梗塞のためクリミヤのシンフェローポリで亡くなった。僕はたいへんな苦勞の末、航空券を入手してようやく葬儀に間に合わせた。霊柩車に乗って墓地へ向かう途中、僕の胸には急に悲しみと無念さがどっと押し寄せてきて涙を抑えることができなかった。幼年時代に視力を失ってしまった和子の運命を思い返していた。家の中

庭で近所の男の子たちと遊んでいたとき、誰かが投げた大きな石が和子の眼に直接当たって、和子は片方の眼の視力を失ったのだ。和子はシンフェローポリ市の中央墓地に葬られた。僕は名を刻んだ墓標のそばに立って、何とか30年を生きてきたが、二人の幼い子供たちが



裁縫に打ち込む母

を残して亡くなった和子の本当に悲しい、不幸せな人生を思い返していた。

1990年の半ば、母が突然脳梗塞で倒れた。母は歩くことができなくなり、ベッドに寝たきりになった。妹たちが母の世話をしてくれた。

母が病気で入院していたころ、日本から一人の新聞記者が訪ねてきた。記者は長野県の新聞社の人で、誰かから母が長野県出身だということを聞いて、母に会うことに決めてポロナイスク市を訪れたのだ。それは冬のことだった。外は雪で、寒かった。記者は母とはほとんど話はできなかった。というのは、母はもう何も話ができなかったし、何も分からないままベッドに横たわっていたからだ。

しかし、記者は当時サハリンに残っていた他の日本人たちのことを取材して、帰国後とても素晴らしいビデオフィルムを作成して送ってくれた。僕はそのビデオカセットを今も大切に保存している。

母はその後も長期の闘病を続けていたが、1991年3月29日、77歳の生涯を閉じた。

母の葬式には大陸からもすべての親族が集まって、別れを惜しみ、死者を葬った。母はポロナイスク市の古い墓地に父と並んで埋葬された。

ソ連邦の崩壊とその影響

ソ連邦崩壊後、すべての大企業は次第に稼働を停止し、工場等を閉鎖するようになった。労働者には給料が支払われなくなり、払ったとしても、部分的に、取るに足らぬ額だった。多くの労働者が解雇され、大陸へ去っていった。大陸へ移住できる可能性のない人たちは解雇されないでそのまま工場に残っていた。そして、休暇を取り、賃金を払ってくれる場所を探して働いた。また、多くの人が何か商業活動、つまり商売を始めた。僕もただ手をこまぬいてはいなかった。休暇を取って、週に2回日本企業の冷蔵倉庫建設作業へ出かけた。一つはユジノサハリンスク市の第二熱併給発電所のある地区で、もう一つはドーリンスク市（落台）の近くの漁業村スタロドーブスク（栄浜）だった。これらの仕事を紹介してくれたのは、熱併給発電所の設備関係の始動調整作業に来ていた友人たちだった。彼らは僕のことをよく知っていたので、少しでも稼げる仕事を紹介してくれたのだ。僕はこういう仕事をするのを断らなかつた。新しい仕事を体験してみたかったからだ。僕は電気関係だけでなく、様々な仕事をやったが、うまくやれたと思う。そして、僕は漁業工場

の電力計の修理工としても（アルバイト的に、労働者半分として）働くことになった。この漁業工場「ドルージバ」は敷香で閉鎖せずに稼働し続けていた唯一の大企業だった。もちろん、給料は少なかったとはいえ、ちゃんと期限内に払ってくれたのだった。

祖国日本への最初の旅行

日本政府と小川快一氏を代表とする日本サハリン同胞交流協会のお陰で、私の最初の日本への旅行が1992年5月の初めに実現した。

日本で僕たちのグループは至るところでたいへん盛大に、華やかな歓迎を受けた。大勢のグループが歓迎してくださった。また、大勢のリポーターと記者たちが私たちをインタビューした。

東京に着くと、東京と長野県穂高町から来た親戚の人たちが僕を迎えてくれた。僕はグループの皆と別れることになった。その晩はホテルに泊まったが、翌日電車で長野県へ向かった。そこは帯同・案内してくれる親戚の人たちと母と父が生まれた故郷なのだ。

穂高町に住んでいる母方の親戚一同が僕を歓迎し、嬉しそうに出迎えてくれた。多くの名所旧跡へ案内していただき、何度も歓迎の宴を設けてくださった。父

の故郷である松本市と母の故郷穂高町の市役所を表敬訪問し、僕が生まれた洗馬村も訪れた。僕が日本へ来ることができたことを親族の皆さんが喜んで、満足してくれたのだ。僕はおじいさんやおばさん、従兄弟と従姉妹たちにも会った。そういう中で僕の心にはただ一つの思いが渦巻いていた。何と無念だったろうか、両親は長年自分たちが生まれ、子供時代を過ごし、学校に通った故郷で親族の皆さんに会うことをあれだけ願っていたのに、ついに再び故郷の土を踏むことが叶わなかったのだ。

僕の従兄弟の小川吉夫は穂高町で写真館を営んでいるが、彼は僕の最初の母国訪問を記録した写真を収めたアルバムを記念にプレゼントしてくれた。

5年後に僕は協会が企画してくださった2度目の母国訪問団に加わって日本旅行へ行った。その時は訪問団のプログラムに従って行動することにした。僕たちは東京の名所旧跡を見学し、デイズニールランドや動物園、水族館などを訪れ、デパートで買い物をした。

祖国への永住帰国

三度目の日本への旅行も行われた。しかし、今度は旅行ではなく、日本への永住帰国を決心し、北海道の

稚内市を選んだ。1999年2月8日、出国の準備を整えた僕たちの一行は、ユジノサハリンスク市の空港から飛行機で飛び立った。…こうして僕にとってはまだ予測し得ない父祖の地での新しい生活が始まったのである。…



穂高町の小川写真館で、後ろ左端が小川吉夫氏、右3番目が信捷

沖縄祖国復帰 宮古島ロランA局引き継ぎの （その1）

普通会員 岩 尾 亮 二



令和元年を迎えた今、39年間の海上保安庁灯台部（現在は交通部）での勤務を終え14年目を迎えている。いまだもって職務意識は残っているようで、新聞、テレビでの報道で海上保安庁に関するニュースなどには目が止まり、耳が傾く。最近では沖縄の尖閣諸島海域での中国船の領海侵入の記事がよく目にとまる。また、若い時、沖縄での勤務経験があるため、米軍の普天間基地の返還の問題も関心が傾く。その時、不思議に私の記憶に浮かぶのが昭和47年の沖縄の祖国復帰と海上保安庁による宮古島ロラン局の米国コーストガードからの引き継ぎ運用であり、転勤と言うか、旅行なのか、出張なのか宮古島に渡り沖縄祖国復帰と言う日本国にとっても大きな出来事とコーストガード隊員と共に過ごした宮古島ロランキャンプでの日々と私にとつて様々な経験を積ませてもらったことが思い出される。同時に海上保安学校での学びの時代、沖縄の祖国復帰

運動も活発で、当時、奄美群島の与論島と沖縄の辺戸岬との中間海域で漁船に乗り返還を願う沢山の人々が出会い、歌にもなっていた「沖縄を返せ〜」を合唱していたテレビのニュースが思いに浮かぶ。考えてみると、あの沖縄の祖国復帰、宮古島ロラン局の米国コーストガードからの引き継ぎ運用は海上保安庁にとっても大きな事柄であったと思う。また、単に行政の一分野の海上保安庁の課題でなく、日本国にとっても日本国民にとつても沖縄の方々にとつても国際的にも大変な事柄であったわけであり、パスポートを持ち、ドル紙幣を財布にこれ大阪の伊丹空港を飛び立ち、那覇空港に、そして宮古島空港に降り立った時が夢のようであり私にとつても大きな体験であった。かの有名な「喜びも悲しみ



宮古島ロランステーション全景

も幾歲月」の映画の思い出が色濃く残り、灯台での仕事は転勤が当たり前と思つて海上保安学校を卒業した当時であり、初任の地、野間池ロラン航路標識事務所が所在する鹿児島県加世田での若い仲間の思い出や野間池ロラン局が所在した薩摩郡笠沙町で繋がった色々な絆が思い返されると同時に新展の地での未知への巡り合いに夢を抱いての出発が今になつても鮮やかに思い出される。

昭和40年代は日本が工業立国として大きく羽ばたいた時代であり、今で言うグローバル化社会の始まりと言える時代であつたと思う。外国航路の船舶、航空機で旅行客が出かける映像がニュース等で当たり前前に報じられる時代になり、その航法を支えたのがロラン、デッカ、オメガであつたと言つても過言ではない。同時に科学技術の目覚ましい発達の元、ロラン、デッカ、オメガがGPSにとつて代わる時代であつたと言える。運用を引き継いだ宮古島ロラン局へ米国コーストガードからGPSの試験システムであつたNNSの測定に訪れ共に作業を行ったことも思い出される。

この様に社会的情勢から見ても大きな歴史の流れの中での政策であり、また、海上保安庁にとつても、海上保安官としての私個人にとつても大きな出来事であ

りながら、本誌、燈光で体験者が書き記して紹介された記憶はない。琉球沖繩は長い歴史の中で、東南アジアから中国大陸文化と日本を結ぶ交易、流通の重要な役割を担ってきたという文献もある。祖国復帰を果たし基地問題を抱えて50年となる今、琉球沖繩には沢山の外国人観光客が訪れ古来からの伝統であつた交易、流通の島としての伝統を取り戻してきているのではないだろうか。沖繩の祖国復帰、宮古島ロラン局の返還引き継ぎは、古い話で「今さら」と言えなくもないが記憶に残る範囲で体験を紹介してみようと思う。

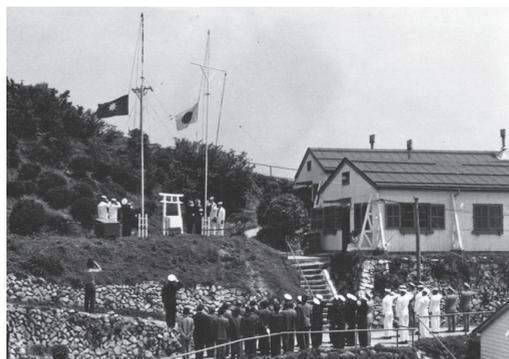
その1 沖繩宮古島ロランステーションへ

私が海上保安学校を卒業し初任の地である野間池ロラン航路標識事務所へ着任したのが昭和44年春、当時、米国軍政下にあつた小笠原諸島の返還が昭和43年に実現し新聞、テレビ等で大きく報じられている時代であつた。同時に沖繩祖国復帰も実現するような報道が巷に流れる時代でもあつた。そして、着任した野間池ロラン航路標識事務所が米国コーストガードから引き継ぎ運用に入つたのは、私の着任の2年前。

着任当時の野間池ロラン局は、運用している施設、機器にも沢山のコーストガード運用の色合いが残り、



野間池ロラン局



野間池ロラン局引き継ぎ式

先輩職員の方々の話題にも引き継ぎ式の様子やコーストガード隊員たちとの交流の話題が残り平素の勤務の中で話題として話される職場への着任であった。つまり、米国コーストガード管理下にあるロラン局を海上保安庁が引き継ぎ運用するという課題において野間池ロラン局の職員は既に体験し、沖縄祖国復帰、宮古島ロラン局の引き継ぎが現実的に話題になる事務所であったわけである。ちなみに、当時海上保安庁が運用していたロランA局全般を見ると、落石、大釜埼、波埼、

八丈島、松前、新潟、米子、対馬に所在したロランA局は全て米国コーストガードが運用していた無線局を海上保安庁が引き継ぎ、一部は韓国から移転させたり電源設備等を新たに整備したりして海上保安庁が引き継ぎ運用してきた経緯があり、野間池ロラン局での話題では宮古島ロラン局の引き継ぎが特別な事と言う雰囲気は感じられなかった。そのような状況下、コーストガードからの返還を体験した職員間では、沖縄祖国復帰に伴う慶佐次と宮古島にあるロランA局の引き継ぎ運用も当たり前と言うような考えで話題になっていた。そして野間池ロラン局勤務3年の経験を経て、若者の特権と言うか南の島に挽かれるように勤務希望調書に沖縄祖国復帰に伴い引き継ぎ運用される宮古島ロラン局希望を書いた覚えがある。

当時の日本は戦後復興を成し遂げ私達若者にも車が持てるような社会情勢。日本の経済力が世界の経済を左右するような勢いであった。現在の内閣総理大臣「安倍晋三」総理大臣の伯父さんあたり昭和49年にノベル平和賞を受賞された「佐藤栄作」総理と米国の

ニクソン大統領の間で沖繩祖国復帰が決定し調印されたのが昭和44年、私の野間池ロラン局着任の年である。

片や米国はベトナム戦争の眞只中、世界中で反戦運動が勢いを増し、ベトナムでの戦局もままならぬ状況での沖繩祖国復帰であった。

復帰の期日は昭和47年の5月15日に決定する中、引き継ぎ運用にあたる私達への人事異動の内示は、海上保安庁内の手続きに沿い、3月上旬に届き、第十管区海上保安本部管内では野間池ロラン航路標識事務所から3名、そして長島デッキカ局から1名、合計4名、加えて全管区からロラン局勤務経験者6名、合計10名の陣容であった。前例のない人事異動であり諸手続きに何度も管区本部へ足を運ぶ毎日。また、内示の内容にも追加事項が加わる。私達十管区出身者は五管本部への出向、大阪海上保安監部、大阪ハーバーレーダ局への併任、他の管区の方々は第三管区海上保安本部及び管内事務所への併任であった。後日、知る事であるが全く前例のない組織事務所の無い地への転勤であり、都市手当を付けて御苦勞賃として、また信ぴょう性は判らないが、琉球政府の職員の給与が高く、内地から赴く職員との給与のバランスを取るためだとか、色々な事を耳にする。若さの強みと言うのか、無頓着

と言うべきか給与の額など何も意に介せず南の島、宮古島を夢見ての出発であった。ちなみに、慶佐次ロランA局は同局がロランC局と並局であり引き継ぎの対象にならなかった。

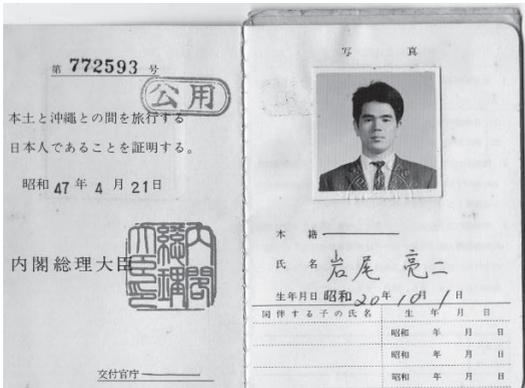
4月に入り、転勤の準備、転勤の荷造りをしても行先の宮古島には宿舍は無い。荷物は事務所の車庫に預け、家族持ちの方は暫し単身赴任。出発は5月15日の返還日から逆算して4月24日に決まり、公務の外国出張扱い。それまでに、パスポートの作成、出張旅費と外国出張準備金とやらを概算で受け取り、日本銀行鹿児島支店へおもむき、ドルに両替、テンヤワンヤノ日々。総額200〜300ドルぐらいを受け取ったと思、うが記憶は薄い。当時の円、ドルの交換レートは1ドルが360円の固定相場からマーケットの市場相場に移行して行った時代であり、1ドルが295円でチェンジした記憶が残る。現在の1ドルが100円前後の国際為替相場から見ると日本国民はまだまだ厳しい経済であり暮らしぶりであったのだろう。

まず、事務所職員、家族の方々の見送りのもと、4名そろって事務所官用車で送ってもらい鹿児島市内の第十管区海上保安本部へ挨拶。鹿児島から夜行列車で神戸へ。事務所出発の時、個人的にはロラン局事務所

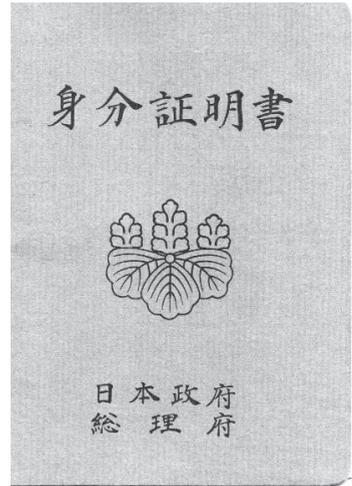
勤務時代お付き合いのあった沢山の地元若者に見送られ、その若者の中に将来を考える女性もいて沢山の若者の後方で笑顔も認めたが、沖縄宮古島ロン局への夢が勝っていたようである。また、私の出身地、熊本県八代の家族も私にとって初の転勤であり、それも沖縄と言ふことで夜行列車が停止する熊本県八代駅で親戚家族がホームに待機して見送ってくれた。そして翌朝神戸着。神戸五管本部へ挨拶。五管本部で七管区からの引き継ぎ異動者2名、五管区からの異動者1名が加わり、合計7名で併任先である大阪海上保安監部ハーバーレーダー所へ挨拶し大阪海上保安監部の海交クラブに宿泊した。



大阪伊丹空港出発ロビー



沖縄渡航の特別パスポート



夜は大阪ハーバーレーダー所主催の懇親会が計画されていて道頓堀まで練り出した。通天閣を見上げ大きな蟹の看板が手招きをしていた記憶が残る。翌26日朝、大阪ハーバーレーダー職員の運転する官用車で伊丹空港へ。国際便発着ロビーで出国手続き、搭乗手続きを済ませ、空路沖繩、那覇へ。約2時間近くの空の旅であったと記憶している、まず目に入ったのが那覇空港周辺のサンゴ礁の海の輝き。これからの宮古島ロラン局での引き継ぎの仕事の不安と緊張を吹き飛ばすような美しさであった。

那覇空港へは琉球政府海上保安庁の職員の方々が迎えて来ていただいでいて琉球政府へ、海上保安庁の案内板が掲げられている部屋に導かれ挨拶を済ませる。当然、琉球政府の海上保安庁である。同時に一管区からの引き継ぎ異動者1名と二管区から1名、三管区から1名、合計3名が加わり宮古島ロラン局を引き継ぐ要員10名が揃う。何が、どうなのか考える暇もなく事が進んでいった。

那覇、泊港近くであったと思う、移動途中で泊港の岸壁に沢山の米軍の車両が荷揚げされていて、どの車両も大きく壊れていた。崩れ具合と、その種類と量の多さでベトナム戦争に使用された車両等であることが

すぐに理解できた。那覇、泊港の宿泊施設であったと思う、広い畳の部屋に案内され10名全員が雑魚寝で一泊することになった。近くには沖繩独特の露天市場があり、肉屋さんらしい一角には何頭もの解体されていない丸のままの肉が下げられ、その中には犬と同じ大きさの肉も下げられていた。異文化を感じながら、皆に誘われて琉球ソバ屋さんに入り空腹を満たしたが、チャンポンと同じような味でもおいしかった。その日は、10名全員が広い畳の部屋に雑魚寝で一夜をあくす。飲み歩きになれた先輩職員の中には、夜間そつと外出したらしく、朝は寢床にいて窓を開けると外出した服装のまま外の板張りに寝ころび朝を迎えた方もいた。振り返ると皆さん元気百倍であったことが思い出される。

翌27日朝、那覇空港へ、到着の国際便ターミナルに比べこれまた小さいバス停並みのターミナルへ。沖繩の各離島を結ぶ南西航空のYS11に手荷物重量を計って搭乗、約1時間くらいの飛行で宮古島上空へ、島一面が畑、山は無い、周りの海岸はほとんどが砂浜、そして島全体を囲むようにサンゴ礁の広がりが一望に目に入る。太陽の輝きを跳ね返さんとばかりに輝く海の広がりが見えた。そして、空港に着陸。沖繩美人の

スチャーデスの案内で飛行機から顔を出したとたん
目目が痛くなるような太陽の光。そして、空気の暑さ。
4月とはいえ、内地の真夏以上の様相に要員一同「凄
いなー」の言葉だけでターミナルビルへ急ぐ。即座に
上着を脱ぎ、汗を拭く。

琉球政府海上保安庁の職員の案内で宮古支庁へ、そ
して支庁長へ挨拶、その後市内で昼食、勿論ドルでの
支払い。米国風のレストランが多い中、散策を兼ねて
歩く。レストラン店頭のレプリカをみながら歩く、価
格が安い。大きなイセエビの料理が3ドルぐらいであ
った記憶が残る。ドル経済の強みなのであろう。昼食
にイセエビとはいかず、簡単に済ませ、そして、タク
シーで宮古島ロラン局へ。

異動は全てタクシーを利用、そのタクシーがすべて
古く、シートは何故かどの車両も破けていた。運転席
は左ハンドルであり、日本の外国向け輸出車両を長く
使用しての結果なのであろう。同時に米国と同様に「人
は左、車は右」の通行区分で走行感覚が違い、客人で
ありながら、交差点での車両の擦れ違いでは衝突の危
険性にドキドキの連続。そして、宮古島の東端、城辺
町保良の東平安名崎にある、目的地の宮古島ロラン局
着。タクシーの運転手は「ロランステーション」まで

です。ねと言っていた。宮古島ロラン局を地元の方々は
「宮古島ロランステーション」と言っていた。

まず、目に入ったのが米国キャンプ地特有の黄色の
建物と大きいジープ。そして、何故か赤色の小さな鳥
居が庭にたてられているのが強く印象に残る。記憶は
確かではないが、隊長が食堂で歓迎され、即座にこれ
から寝泊りする部屋へ案内される。それも隊長自らの
案内である。私達メンバーの所長、次長はゲストルー
ム、ほか8名は2名ずつ二段ベットの簡易な仕切りの
4つの部屋に案内を受け荷物の整理。ロランステーシ
ョンでの到着作業は隊長が受け入れ実務を進めている
様子で、極めて格式張らない必要本意の作業であった
印象が深い。通路、食堂で合う隊員は目で会釈はする
ものの自分の仕事を淡々と進めている感が深かった。
これも、アメリカンスタイル、隊員の入れ替わりの激
しい米軍キャンプの日常の勤務と暮らしぶり、業務の
スタイルであったのだろう。

この様な雰囲気、暮らしぶりは引き継ぎ式までの約
20日間変わることはなかった。隊長は大学出たてで若
く、副隊長は軍曹クラスで古老の方。そして食事を預
かるコックさんと無線技術士と風格のあるロラン局運
用のチーフも年配であり制服姿であったが、ほか隊員



日本の鳥居と星条旗 局舎

は皆若くラフなジープン姿。

隊長から後に聞いた話であるが、米国は5軍体制、陸軍、海軍、空軍、海兵隊に加え沿岸警備隊。沿岸警備隊はUSコーストガードであり、国内勤務の時は軍でなく警察行政、国外に出ると軍隊の扱いになり軍歴になるそうである。この様な話も耳にした。当時、米国は徴兵制であり、コーストガードを希望すると軍歴になる。加えて、ベトナムでは厳しい戦争が継続中。お金持ちの家庭で厳しい軍隊での勤務を希望しない家庭の子弟はコーストガードを希望するとの事、信ぴょう性は判らないが、宮古島ロランステーションの若い隊員の中には牧場主の子弟やお金持ちの子弟が多いと

の事も耳にした。実際、隊員の中に皆からカーボーイと呼ばれ、元気の良い若者がいた。その若者は実家が大きな牧場主であったとの事。

私達の中心

課題は宮古島ロラン局、2S8レート、2S9レート（相手局はフリッピンバターン島）の引き継ぎ運用であるが、まずは宮古島ロランステーションでの共同生活がどのようになるのか不安がいつぱい。物珍しさと緊張の中で、アメリカンスタイル、加えて米国海軍スタイルのキャンプでの生活が始まった。隊員との共同生活とロラン局引き継ぎ運用の作業については続きで紹介していきたい。



宮古島ロランステーション施設
右上方（海岸側）：局舎
中央：テニス、バスケットコート
下方：隊舎、食堂、娯楽室

次号に続く

燈光歌壇



桜沢つや子選

横浜 宮田 昭

葉山 長島 博子

- 幕府砲台跡なりしお台場に礎を下す白き船あり
- 沖泊り祈りは熱し母島の夜の山上にひかる十字架
- 蹠跟と群れゆく人と同様の船乗りなりし通去も古い初む

- 昭和なる望郷の過客転勤のその一代を黙し語らず
- 執着駅近づき下車の準備する各駅停車の人生航路
- 捨つるべき感傷なりき過ぎ去りし航歴に甘ゆるわれの幻

- 北海道松前燈台に赴任して知る海鳴りと瀬戸の慟哭
- 出雲なる岬の端の日御碕際立て海に夕陽は沈む
- 日本海津軽海峡分けて立つ龍飛灯台影絵のごとし
- 風荒き地球岬の灯台は海霧に囲まれ威厳を保つ
- 北航路流水続く根室沖遙かに望む国後燈台

評 多感な感情に溢れ初々しい作者が見える。海鳴りは津軽の暴風雨の前兆として鳴り響く。まさに瀬戸の慟哭、勤務地での折々の作品に思いが暖かい。

- 冬至梅咲く十二月はつむ声今年は聞かず新年となる
- 障子貼り蒲団つくるひ荒れし庭の植木屋さんにそつと手を貸す
- 暖冬に顔を出したるチューリップの芽に語りたり球根選びしを

○細き月雨戸引くを忘れさす月の世界は寒いでしょかね
評 やつと芽吹いたチューリップの芽に貴女を選んだのよと親しく語り、月の世界は寒いでしょと語る作者の童心と暖かさ、年齢を重ねてもい失いたくない。

近詠

桜沢つや子

- 名月の夜さく隣のえりちゃんの結婚するとふ佳き話
- 空に向く水引の赤き小花を揺らす風ごと夕日が照らす
- 点々と花序の脹らむ水引を揺らして雨の降り始めたり

第17回 灯台フォーラムを開催します！

灯台フォーラムは、海上安全における灯台の重要な役割を再認識しつつ、灯台を文化的、歴史的、美的観点から見つめ、語り合うことを目的とした灯台ファンのための勉強会です。

今年は基調講演として「第二海堡と第二海堡灯台」、さらに「明治期灯台の日本人技手」をテーマとしたお話を依頼しています。

そして初の試みですが、懇親会会場としてクルーズ船を予約しました！海風を浴びながら楽しくおしゃべりしましょう！（ワンドリンクとちょっとしたおつまみ付き）

去年は全国から約100名の灯台ファンがあつまりました！初めての方、おひとりで参加の方もどうぞお気軽に。



開催日：2020年5月30日（土）

時 間：フォーラム 13時50分～16時50分（受付開始13時20分）
懇親クルーズ 17時30分～19時00分

参加費：5000円（横浜港のクルージング費用込み）

会 場：波止場会館 5階 多目的室
横浜市中区海岸通1-1（日本大通り駅から徒歩5分）

予約開始日：3月1日（日）正午

申込方法：右の二次元バーコード
もしくは「灯台どうだい？」HPから、
申込フォームにアクセスし、必要項目
を入力してください。



座席に限りがあるため定員になり次第締め切りとさせていただきます。

もし、新型コロナウイルスの感染拡大を予防するためにイベントを中止することになった場合は、申し込みフォームにご登録いただいたメールアドレスへご案内をお送りします。
また「灯台どうだい？」のHPでもお知らせします。

昭和三十一年三月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

三月号 第六十五卷 第二号

